

## シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔V〕 ～デカルトの〈âme〉の諸能力について（その2）～

村 上 吉 男

### 10. 精神の能力〈sentir〉や〈imaginer〉と他の諸能力のまとめ

そこで筆者は前回語った〈血液〉を〈栄養を取り、成長する原理〉に、同じく精神のある「能力」を〈思惟する原理〉に置換しかかわらせることで、そのおのおのが〈身体 *cerveau*〉かつ〈精神 *âme*〉とされる〈腺〉や、後述にて当初より〈精神 *âme raisonnable*〉でしかないと明かされる〈脳の中樞部位〉において、さらにはその各部位の周辺においてどうあるのかをここに繰返してでも整理し直し、補充すべきことをその都度付加していく必要がある。

まず一に、〈腺〉が身体と指摘される際に、〈動物精気〉にはときに身体の感覚たる、ときに身体の想像たる各能力が適当し、これらがその〈栄養を取り、成長する原理（血液）〉である〈動物精気〉に〈混ざる〉だけをさすにすぎなかった。この身体の各能力はしかし、身体の各能力であり続けるかぎり、別言すると〈腺〉に達していても、〈理性的精神〉の〈sentir〉や〈imaginer〉の各働きかけを受けぬかぎり、〈思惟する原理〉にかかわるとみる各能力ではあり得ない。したがってここでいう〈動物精気〉は身体の各能力と〈栄養を取り、成長する原理（血液）〉で構成されたりするほかないと捉えられる。

ところが一に、〈腺〉が〈精神〉とみなされる際に、すでに〈思惟する原理〉を有するといえる〈理性的精神〉の〈感じる〉は身体の感覚に、またかかる〈想像する〉は身体の想像に働きかけて、それぞれ〈âme〉としての〈sentiment〉や〈imagination〉を産出させることが示唆されたから、〈動物精気〉はもはや身体の各能力とはならない、〈思惟する原理〉に基づいたこの新たなとってよい各能力を今度は〈栄養を取り、成長する原理〉に〈混〉ぜ合わせるものとなるわけである。つまり〈腺〉内において、ときに〈動物精気〉は新たな各能力につくりかえられるといえようが、それでもいまだ〈血液〉とともにあるという

ことである。筆者はこの新たな各能力と〈血液〉が〈混ざる〉という各〈動物精気〉によって、〈心身合一〉がデカルトに構想されたと予想できてくる。要はかかる際の〈腺〉が精神と身体を融合させると予見するにしろ、〈理性的精神〉の〈感じる〉や〈想像する〉各能力の働きかけなくば、少なからず〈精神〉としての〈sentiment〉や〈imagination〉は〈腺〉に誕生しなかったのだから、ここからもしばしば強調してきたことが、すなわち精神優位となることが、その〈動物精気〉に身体的要素である〈血液〉が〈混ざ〉っているとの指摘にもかかわらず、間違いないと捉えてきた。

だが果たしてそう断言し得るのか。繰返すが、筆者は確かに、〈腺〉は〈血液〉と新たな各能力をいっしょにしてみるときに、つまり詳細にいうと、ときに〈思惟する原理〉が身体感覚や想像に関与せずにおれぬから、新たな感覚や想像を〈腺〉に生み出そうとするばかりか、この時点で〈腺〉を明らかに〈精神〉として位置づけさせ、その〈精神〉をして、〈動物精気〉をもって表現させるかぎりには〈思惟する原理〉に基づいた新たな各能力と〈栄養を取り、成長する原理〉とで組成たらしめるときに、はじめて〈腺〉は〈âme〉に見立てられるといってきた。ところが現に〈腺〉がこの二つの〈原理〉を満たして〈âme〉になるとみなすと、〈âme (腺)〉は身体的要素である〈栄養を取り、成長する原理〉を含むし、そのことは、もしや〈思惟する原理〉たる〈理性的精神〉の〈感じる sentir〉や〈想像する imaginer〉さえそれぞれ、身体感覚 (sens) や想像 (imagination) に対応せずにおれなくもなるから、この〈理性的精神〉のいわば〈理性的〉特徴を消失せしめる、つまり身体的要素を有する能力になるしかなく、しかもそのとき産出されよう〈sentiment〉や〈imagination〉の中味にも当然身体的要素が加えられてあるといわざるを得なくなっている。だから筆者は、〈腺〉が〈âme〉であるとは何をさし示すかを改めて質すことで、精神優位とされることを明かそうとするわけである。そうしないと、〈腺〉における〈âme〉の概念は、シモーヌ・ヴェーユがこれをさして語るのではないが、デカルト説に対してよくいう〈不明瞭、難点、矛盾〉に充当しとどまると察知されるからである。

しかしながら既出引用文⑨の文章を想起し参照してみよう。そこからは、〈腺〉に働きかける〈sentir〉や〈imaginer〉は別にして、〈腺〉(の表面)で表出しよう〈sentiment〉や〈imagination〉には(後述)まったく身体的要素が含ま

れないとみることができるのである。そこを捉えて、筆者が〈腺〉を〈âme〉と命名することはこの〈âme〉を措いて〈精神〉がないことを、したがってその〈精神〉と身体とを融合させるデカルトの〈日常的用法〉にあっても、彼がこのような〈精神〉を指摘することに執拗に拘るかぎり、〈動物精気〉中の〈血液〉ではない要素をして、要するに〈sentiment〉や〈imagination〉の新たな各能力だけをして〈âme〉たらしめるは〈精神〉が優位となることを示唆するにほかならないということである。既出引用文の文章とは、〈表象は…（動物）精気によって、想像と共通感覚の座である腺Hの表面に描かれる表象だけなのである〉（傍点部分は筆者）と記されるところである。だがその際、新たな各能力は端から傍点部分の〈腺Hの表面に描かれる（表出する）表象〉に該当するとは断じてならないのであって、いわば〈腺〉内で産出された、換言すると〈脳（身体）中の〈腺〉の〈動脈〉を通る〈動物精気（血液）〉に〈混〉じった身体の想像や感覚の各能力に対し、同引用文④の前文に述べられるごとく、〈理性的精神〉の〈imaginer〉や〈sentir〉が働きかけては誕生し出す〈imagination〉や〈sentiment〉であるにすぎない。だからこの新たな各能力の産出（誕生）はいまだ〈動物精気〉に属する、つまり身体的要素である〈血液〉とともにあるとまずは読んでおくことが課せられる。

なんとすれば、既出引用文⑫の訳文に、筆者が括弧を付して④（動物精気たる〈想像したり、感じたりする〉…）と記した箇所を、かつ既出引用文④⑤に③〈動脈が含む血液のもっとも細かな粒子がその腺に流れることができる〉と、さらに本文後記引用文⑩に②〈腺は、… 脳本体と完全に結びついてはいないが、それでも小さな動脈につながれ〉ると語られる箇所を踏まえると、身体的要素がどうしても、まず〈sentir〉や〈imaginer〉のそれぞれに、そしてこの各働きかけをもって産出されよう〈sentiment〉や〈imagination〉のおのおのにあるといわずにおれなくなるからである。要は筆者にとって、身体的要素が含まれる〈精神〉は、この新たな各能力が〈腺（H）の表面に描かれる表象〉となるのでなしに、〈腺〉内の〈動脈〉中の〈動物精気〉たる〈血液〉と〈混〉じり合いながら産出されるかぎり、〈âme〉にならない、したがってこの新たな各能力も〈âme〉の能力に与しない、とどのつまりその際の〈腺〉は身体、〈腺〉のこの新たな各能力は身体的能力でしかないということになる。

ところで前段④⑩⑪の引用文に、さらに④⑤の③〈心臓から血液の粒子を運

ぶ動脈は、… 脳の凹みの入口のところの、脳本体のおよそまん中に位置した小さな腺のまわりに集まっている」という文章を加えてみると、たとえば〈動脈〉たる単語は⊕と⊙のそれを含め「複数形」で表現されるし、⊖と⊕を同じものと捉える〈動脈〉は〈腺のまわりに集ま〉るそれと指摘できよう。すると⊙の〈腺は、… 小さな動脈につながる〉と語られる〈小さな動脈〉は⊖と⊕が同じ〈動脈〉とみたのに比べ、どうなのか問われくる。これは〈腺〉を例にしていえば、〈腺H〉や〈小さな腺〉が修飾語のない〈腺〉と同意の表記となるに反し、異なる語であると理解されねばならない。しかも⊙の〈腺〉の〈小さな動脈〉は「複数形」だからして、一方では⊖ (⊕) の〈動脈〉に接続し、他方では⊖における〈脳本体〉にでなしに、⊙でいう〈腺〉につながれよう語であると察知される必要がある。前者 (一方) にあって、⊖ (⊕) の〈動脈〉に結びついた〈小さな動脈〉は、すでに〈腺のまわりに集ま〉る〈動脈〉であり得ないが、しかしその〈動脈〉中の〈動物精気〉を、換言すると身体感覚や想像の各能力の〈混ざ〉った〈血液のもっとも細かな粒子〉をさらに〈腺〉内に向けて流れさせる〈動脈〉の一でしかない、要は〈動物精気〉が〈脳〉に入ってから、〈腺のまわり〉にある⊖ (⊕) の〈動脈〉と、これに接続し、〈腺〉内にある〈小さな動脈〉に入る以前における流れは、〈脳〉に達する「求心的」な流れであるということなのである。また⊕でいう〈動脈が含む血液のもっとも細かな粒子がその腺に流れることができる〉は、この〈動脈〉中のかの〈粒子〉がさらに〈小さな動脈〉を経由して「遠心的」に〈腺に流れる〉ことを、〈腺に流れる〉とはかの〈粒子〉が〈腺〉内の〈小さな動脈〉のなかを通ることを示唆させるほかないのである。後者 (他方) にあって、〈腺〉 (内) の〈小さな動脈〉が⊖や⊙でいう同じ部位としての〈脳本体〉とかかわらずにおれないのは、〈小さな動脈〉とは今度は、それが〈腺〉 (内) から出て〈動脈〉につながるごととともに、この〈小さな動脈〉をしてその〈動物精気〉を〈脳本体〉にたどらせんとする、これもまた「遠心的」な流れたらしめる〈動脈〉の一とさせることをさすからである。〈動物精気〉がこの〈脳本体〉にとどかずば、〈脳本体〉は〈栄養を取り、成長する〉ことが不可能になろう。あるいは⊙から〈腺〉が〈脳本体〉と一つ (一体) であるとみられぬにせよ、〈脳本体〉が〈腺〉に、そのなかであろう〈小さな動脈〉につながらないでは、筆者が〈脳の凹み〉と〈脳本体〉を〈脳の中樞部位〉と断じ、〈理性的精神〉たるその〈部位〉より、

〈sentir〉や〈imaginer〉の各能力が「遠心的」な〈神経を介して〉、〈腺〉に入り、〈腺から出る〉以前のその〈小さな動脈〉中の〈動物精気〉に働きかけることは不可能になろう。

しかしながら〈腺（内の小さな動脈中の動物精気を構成する身体の感覚や想像）〉に対し、〈脳の中樞部位〉なる〈理性的精神〉の〈感じる sentir〉や〈想像する imaginer〉の各能力がそれぞれ、〈動物精気〉が〈腺〉に入っているとはデカルトに語られていないが、それでも〈腺から出る〉以前とみることに於いて働きかけ、その〈腺（内の小さな動脈）〉で新たな〈感覚〉や〈想像〉の各能力を産出（誕生）させたとしても、この〈sentiment〉や〈imagination〉の新たな各能力は両方、身体的要素である〈血液（の粒子）〉といかんせん〈混ざり〉合ったままなのである。それにもかかわらず、彼はこの〈腺〉を〈精神 âme〉と、かつこの〈腺〉の新たな各能力を〈âme〉のそれと断言するのか。否である。繰返すが、彼のいう〈日常用法〉の〈âme〉にあっても、身体的要素があつてならない。そこで彼はいかに答えるかである。この新たな各能力が〈腺Hの表面に描かれる〉とき、彼はこのことをさして、〈âme〉とその能力とみなす以外になかったと捉えられるのである。つまり新たな〈sentiment〉や〈imagination〉の各能力が〈腺〉（内）で産出（誕生）されるにとどまることでなしに、さらに〈腺の表面に描かれる〉ことによって、新たな各能力たる〈表象〉は、もはや〈血液〉のない各能力だけで成る〈表象〉にならざるを得ないということである。〈表象〉の意味はそこにしかあるまい。そして〈腺〉（内）で産出（誕生）した新たな各能力の〈腺Hの表面に描かれる表象〉は筆者にとって、「反射」としての〈表象〉にちがいないと理解される。

しからば筆者はデカルトに、筆者が「反射」というに相似した言動を見出せ得るであろうか。たとえばすでに記しおいた、本文後記引用文⑳の〈腺は、... 心臓の熱が腺Hの方に押しやる血液の力によって... 支えられている〉文章と、既出引用文㉖の前記した文章が関連するとなれば、それこそ「反射」に等しくなるとみることを可能にしよう。つまり㉖を〈血液の力〉は〈心臓の熱〉で〈腺Hの方に押しや〉られると、㉖を〈表象〉は〈腺Hの表面に描かれる〉と換言させるにしる、彼は実際そのように記したのだから、そこからは次なることが語られていしかるべきである。㉖の置換した文章中の〈血液〉とは当然、〈血液〉に〈混ざり〉った新たな各能力さえ含む〈動物精気〉をさす。そこでかか

る③の文章は、この〈血液〉が〈心臓の熱〉を加え、それ自体〈力〉となって〈腺H〉に達することを文脈にすると読み得る。〈腺H〉への到達は、この〈血液〉が〈腺のまわり〉にある〈動脈〉から〈腺〉(内)の〈小さな動脈〉に入ることである。その際〈血液〉が〈心臓の熱〉によって〈腺〉に送り込まれるのが常であるかは知らねども、この〈血液の力〉はおよそ強弱に従われると指摘できるであろう。

おそらく〈血液の力〉が「強」と察知されようとき、筆者のあえて不問にしてきた問題がここに浮上する。なぜ〈腺〉(内)の〈小さな動脈〉中の〈動物精気〉が、しかもその新たな各能力だけが〈小さな動脈〉のある〈腺〉(内)ではなく、〈腺Hの表面に描かれる〉ことになるのかと。これを解決に導くに、筆者には以下に掲げる引用文が必要となる。

②Au moment que les artères s'enflent, les petites parties du sang qu'elles contiennent vont choquer çà et là les racines de certains petits filets, qui, sortant des extrémités des petites branches de ces artères, composent les os, les chairs, les peaux, les nerfs, le cerveau, et tout le reste de membres solides, selon les diverses façons qu'ils se joignent ou s'entrelacent. <sup>(63)</sup>

動脈が膨張する際、動脈中の血液の粒子は、あちらこちらでいくつかの細糸の根にぶつかろうとする。この細糸は、動脈の小枝の先端から出て、細糸が結合したり、からまったりするさまざまな有り様に応じて、骨、肉、皮膚、神経、脳、そして堅固な手足ほかを構成している。

④Que s'ils (les petits filets) ne sont qu'ébranlés quelque peu séparément l'un de l'autre, ainsi qu'ils sont continuellement par la chaleur que le cœur communique aux autres membres, l'âme n'en aura aucun sentiment, ... mais si ce mouvement est augmenté ou diminué en eux par quelque cause extraordinaire, son augmentation fera à l'âme le sentiment de la chaleur, et sa diminution celui de la froideur. <sup>(64)</sup> (括弧内・傍点(省略)部分は筆者)

細糸は、心臓が手足に伝える熱によってたえず揺さぶられるように(ある

が、それでも細糸が㉓の〈結合したり、からまったり〉せずに)互いに離れてはわずかしか揺さぶられない。この場合には、精神はそのいかなる感覚も抱かないであろう。...しかし細糸の運動がその普段以上や以下の原因により、細糸にあつて増加したり、減少したりするならば、増加は熱の感覚を、減少は冷たさの感覚をそれぞれ精神に抱かせるであろう。(括弧内は筆者)

二引用文の掲載前に語った問題が、上記㉓と㉔を一読して解決されるであろう。解決に導く語はもとより〈細糸〉となるが、〈細糸〉のこゝを持ち出すためには、まえもって次なる見方が欠かせなくなる。㉓の〈動脈が膨張する〉は㉔にもあるごとく、〈心臓の熱〉に関係してこよう。〈心臓の熱〉が〈血液の力〉にさせるのは、たとえば〈力〉は血液の量を増す表現ではなく、〈血液〉に㉔の〈普段〉に増して勢いをつける表現にあるとみたのだから、この意味で〈動脈が膨張〉もするのである。その勢い(力)にて〈血液〉は〈腺H〉に達しよう。〈腺H〉に達したとは、すなわち〈血液〉が〈腺(内)の〈小さな動脈〉の〈血液〉であることである。それでデカルトはこの〈小さな動脈〉のことを二引用文に書き記すか。しかり。彼は㉓に〈動脈の小枝〉と書き残す。〈小枝〉は〈動脈〉につながる〈小さな動脈〉でなければなるまい。こうして〈細糸〉の出番となる。㉔に〈この細糸は、...動脈の小枝の先端から出ている〉し、また〈動脈中の血液の粒子は、... (〈小枝(小さな動脈)〉から)細糸の根にぶつかる〉ことがようやく質されるからである。したがって〈細糸〉は〈小枝(小さな動脈)の先端から出るがゆえに、〈小枝〉に結びつけられている〉ことができる。要は〈小枝の先端から出る〉にせよ、〈細糸〉は〈小枝(小さな動脈)〉に〈細糸〉の〈いくつか〉を、だから〈小さな動脈(の血管)〉の外壁に添った、その〈先端〉の〈いくつか〉の箇所<sup>1</sup>にわたって付着させ、この血管から〈腺Hの表面〉に向けて〈出ている〉ことをさすだけであり、ほかを、たとえば〈いくつかの細糸〉がすべて、〈小さな動脈(の血管)〉の外壁のある〈先端〉の一箇所に集合し接続されることを示唆させるのではない。

以上で諒解可能なのは、〈細糸〉が〈腺のまわり〉にある〈動脈〉に直接にではなく、この〈動脈〉と〈細糸〉との仲立ちにある〈小さな動脈〉にのみつながり、〈細糸〉は〈小さな動脈(の血管)〉中の〈血液の粒子(動物精気)〉をばさらに、〈腺Hの表面〉の方向へと流すということである。〈動物精気〉が〈細

糸)に流れることは、デカルトによって、㉓に〈動脈中の血液の粒子(動物精気)は、…(〈小さな動脈)から)いくつかの細糸の根におつかる)と記されるからである。しかしながらこの引用文に、同時に㉔も参照し考察しておかないと、㉓中のその〈おつかる)こと(衝突)が少なからず何を語るか明かされてこない。彼は「衝突」が生じるのは、㉔でも〈心臓の熱)によると書くばかりか、この〈心臓の熱)が実際に当の〈細糸)を〈揺さぶ)ることをさして捉えるようである。〈細糸)が〈揺さぶられる)は〈細糸)でさえ〈血液)に「勢い(力)」がつくことを含意させるし、「勢い(力)」がつけられる自体は〈細糸の運動)であるとみてよい。ところが彼は、〈細糸の運動)は〈細糸において(勢い)がつけられる場合の)増加したり(だけでなく)減少したりする)と付記する。このことは〈細糸の運動)には、別言すると〈細糸)の〈血液の力(勢い))には、〈普段以上や以下)が、筆者のみ「強弱)があることを示す。筆者はその際、〈普段)を〈細糸が(血液の力で)たえず揺さぶられる)ことと、〈普段以上)を同じ〈揺さぶられる)うえに、㉔の訳の括弧内に加えた一事項、つまり〈(いくつかの)細糸)が〈結合する)ことと、〈普段以下)を同じ〈揺さぶられる)うえに、㉔の訳の括弧内に加えた一事項、つまり〈(いくつかの)細糸)が〈からまる)ことと読む。だからここでは、〈細糸の運動)にとって、〈いくつかの細糸)がその都度〈結合する)や〈からまる)ことがさらなる各〈血液の力(勢い))あることを意味させると受け取られるわけである。〈細糸)が〈いくつか×結合する)と、〈細糸の運動)は〈増加)し、〈細糸)が〈いくつか×からまる)と、〈細糸の運動)は〈減少)するからして、そこに〈普段以上や以下)あるいは「強弱)の両方を見出せる〈細糸の運動)すなわち〈細糸)での〈血液の力(勢い))が〈原因)すると明かすことこそ、なおも彼をして、〈増加は熱の感覚を、減少は冷たさの感覚をそれぞれ精神に抱かせる)と語らしめるのである。

だがここで、上記引用の〈熱)や〈冷たさ)自体が何か今問うよりも(次回以降の課題)、各〈感覚 sentiment)や〈精神 âme)なる語は何んであったかを再確認すべきなのである。なんとなれば筆者にあっては何を措いても、各〈感覚)は各能力、しかも新たな各能力のことを、〈精神)は〈腺Hの表面)のことをさしているのではなければならなかったからである。すると以上のことでまず、〈細糸)にかかわるはそこに「強弱)が加えられるにしろ、〈小さな動脈)中の

〈血液の（細かな）粒子〉、換言すると〈血液〉と新たな各能力を〈混〉ぜた〈動物精気〉でも、まして単独なる〈血液〉でもなしに、各〈感覚〉という（新たな）各能力であることが明らかにされる。それゆえ前記しておいた「〈動物精気〉が〈細糸〉に流れる」とは、この新たな各能力だけが〈細糸の根にぶつか〉るように、〈細糸〉を伝わる（流れる）意でしかなくなる。そのとき筆者はこの新たな各能力のことを〈動物精気〉として捉えられるのかだ（後述）。とまれ〈細糸〉は、これが自然科学的、科学哲学的または思弁哲学的語のいずれに充当するかは不問にするが、少なくともこの新たな各能力を、さらにこれも後記せざるを得ない〈精神〉のこゝを持ち出し、あわせてかかる各能力を〈精神〉に関連させるためにデカルトに用意された語となるは間違いがないのである。

しかし、新たな各能力が〈いくつかの細糸 (petits filets) の根 (racines) にぶつか (ろうとす) る〉と書かれるにあつて、単数に置き直してみる〈細糸〉やその〈根〉とは、また〈ぶつかる〉とは何かなのである。まず〈細糸〉は引用文⑳に、〈神経 ... を構成している〉と記されるし、あるいはデカルトが他の箇所、〈les petits filets qui composent la moelle de ces nerfs (神経の髄を構成する細糸)〉<sup>(65)</sup>と語るからして、ほぼ神経（の一種）に与するものとみなしてよい<sup>(66)</sup>。さらに〈細糸〉は〈小さな動脈〉の〈先端から出て〉いるにせよ、〈細糸〉の〈先端〉から〈根〉とのあいだで、〈(註(66)によっては「神経線維」となる)細糸〉の一本が引用文㉑では〈揺さぶられる〉と、また引用文㉒では他の一本と〈結合したり、からまったりする〉と述べられるから、〈細糸〉自体は〈腺H〉内でたわみを有し、浮動する、つまり固定されてはいないことが予想され、かつそこから〈細糸の根〉が註(66)でいう「神経」に接続せずにおれないと判断できる（次回詳述）から、その〈根（の近辺）〉において、わけても〈細糸〉が〈結合〉し〈からまる〉ことが予想されてかまわない<sup>(67)</sup>。

次に、その〈根〉が質される。〈根〉のことは、上記註(67)の註欄「以上を踏まえて」以降を参照し、現代生理学でいう「シナプス」に相当すると断じ得るにしろ、いったい〈腺H〉内のどこをさして語られるのかである。筆者はこれに答えるべく、何はともあれ、デカルトが『人間論』にて図を用い、また後記引用文㉓中で説明する通り、〈腺H〉は図によってはほぼ丸い形をした個体として捉えられるし、外見上は㉔で〈小さな動脈につながれ、... まるではかりのせられているように支えられている〉（これは〈腺H〉が〈動脈〉から出た〈小

小さな動脈) 上に乗っかり浮かぶことを想定させる) とみなされるなかで、〈細糸〉や〈細糸の根〉は〈腺H〉の表面に配置されるのでなしに、引用文㊸の〈動脈の小枝(動脈に接続した小さな動脈)〉が〈腺H〉の内部に納められてあることを、かつおそらくは〈腺H〉を〈支え〉る〈小さな動脈〉は複数あって、その各一本は〈腺H〉の内部を曲線的に經由し〈腺H〉の外に出て、再び〈動脈〉に結びつくにちがいない(〈腺H〉にとって〈小さな動脈〉はいわば「引込線」のごときものとなる) ことを、さらに〈細糸〉はすでに記した通り、〈腺H〉内の〈小枝(小さな動脈)の先端から出ていたことを、さらにまた後述もする通り、〈腺H〉前での〈動脈〉から〈小さな動脈〉中に入る〈血液の粒子〉が〈細糸〉に伝わり(流れ)ない場合、〈血液の粒子〉は〈腺H〉内の〈小さな動脈〉を通過し、〈腺H〉の外にある〈動脈〉に戻る(〈血液の粒子〉のうち、一方にいう〈粗い粒子〉は〈小さな動脈〉を迂回せずに、〈動脈〉のみを流れる、要は〈小さな動脈〉に立ち寄り得るは〈小さな動脈〉ゆえに〈細かな粒子〉にかぎられるであろう) ことを確認しておかねばなるまい。ただ以上の確認事項のいくつかは彼にあって明記されはしない事項である。しかししかるべき理解にないと、それこそ〈細糸の根〉がどこにあるかさえ見当がつかなくなるわけである。

〈細糸の根〉は〈腺Hの表面〉のすぐ裏(内)側に接するところに見出されてこよう。〈腺H〉は丸い形をした個体であると理解した。〈腺Hの表面〉はだから、表面自体個体の外側に面していることになる。そこでこの〈表面〉と背中合わせの、〈腺H〉の内部という内側には、〈小枝(小さな動脈)の先端から出た〈細糸〉が〈表面〉の裏側に達せんとしてあることが、また外側たる〈表面〉全体には、およそ〈神経〉が付着し広がってあることが、さらにかかる〈細糸〉と〈神経〉をつなぐ接点が、デカルトのいう〈根〉になることが推察され、接点が〈細糸〉と〈神経〉の境界に位置づけられようとも、境界(根)をば〈腺Hの表面〉のすぐ裏(内)側にあるとするはもはや間違いないといえる(なんとすれば、彼は〈根〉をあくまで〈細糸の根〉とし、神経の〈根〉と表記しないからである)。しかも〈根〉はここでは、前段に「後述もする」として一例を掲げた場合と異なって、〈血液の粒子〉が〈腺H〉内の〈細糸〉に伝わり(流れ)、この〈細糸〉が〈結合したり、からまったりする〉場合にしか問われはしないと指摘することにある。つまり彼は〈血液の粒子〉を運ばせる〈細糸〉の結

合やからまりにおいてこそ、〈根〉のことをその都度持ち出すのであって、その結合やからまりなくとも、〈根〉が複数ある〈細糸〉に最初からくっついたそれとして設定すると捉えるわけにはいかないのである。またここから、〈細糸〉の結合やからまりが〈根〉を複数にするはすでにいうまでもないことにしよう。

そして、前段で記した、〈血液の粒子〉が〈腺H〉内の〈細糸〉に伝わる（流れる）場合であって、しからば〈血液の粒子〉とは何か、はたまた〈血液の粒子〉が〈細糸の根〉にぶつかろうとするその〈ぶつかる〉は何を示唆させるのかを筆者の主張をからませ明かすことが課せられる。まず前者の問いについてである。この〈細糸の根〉に関係する〈血液の粒子〉は、筆者のいう「新たな諸能力（これらは *sentiment* と *imagination* にかぎられる）」でしかないと断じおかねばならない。引用文②における〈血液の粒子〉には〈動脈中の（動脈を含む）〉という修飾語（節）が付加されていた。そこからして筆者は、〈腺Hのまわり〉にある、すなわちこの〈脳〉の〈動脈〉の中味が、たとえば〈血液〉と身体の *sens*（感覚）の能力であったことを想起せざるを得なくなる。〈脳〉の〈動脈〉で〈血液〉のみか、身体の *sens*（あるいは身体の *imagination*）が〈混ざる〉ことがデカルトのいう〈動物精気〉でもあった。そうした〈動物精気〉はまた、〈動脈〉から〈小さな動脈〉にさえ流れずにいなかった（むろん〈小さな動脈〉に流れないのはすでに語ったように、〈血液〉と身体の感覚を例としての〈動物精気〉は粗い粒子となって〈動脈〉だけを流れることになる）。さらに〈腺H〉内の〈小さな動脈〉では、その〈小さな動脈〉を通る〈動物精気〉（〈小さな動脈〉を通るがゆえに、〈動物精気〉は前記の通り、〈細かな粒子〉にならざるを得なかった）に、〈理性的精神〉から〈神経を介して〉働きかけんとする〈*sentir*（感じる）〉や〈*imaginer*（想像する）〉がかかわる場合があった。

だが〈理性的精神〉の上記各能力がたえず、〈腺（その〈小さな動脈〉）〉に向けて働きかけるとはかぎるまい。そこでひとまず、この働きかけないとする場合はどうなるか予想してみよう。それは例の、〈血液〉と身体感覚とが〈混ざ〉った〈動物精気（細かな粒子）〉がそのまま、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉を通り、そこから〈腺H〉を〈出て〉は再び〈動脈〉に戻る流れとなるにちがいない。この流れはそれゆえ、前段終り近くの括弧内に記した、〈動物精気（粗い粒子）〉が当初より〈動脈〉だけを通る場合と相違させずにおかない。この〈細かな粒子〉での流れは何より、〈粗い粒子〉の含まれる〈動脈〉をでなしに、

いわば迂回路 (bypass) に等しい〈小さな動脈〉を通ることにあつた。だから〈腺H〉内を通過しない〈粗い粒子〉の流れに対して、〈理性的精神〉の〈sentir〉が働きかけるはまったく不可能なのである。繰返すが、この〈sentir〉の働きかけを受けないことでは、〈細かな粒子〉の場合ですら同様であつたし、〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉が、ともに〈血液〉と身体の感覚とを〈混〉ぜた〈動物精気〉で構成されることでさえ同じであつた。この〈動物精気〉を〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉に区別するは、要は前者がわけても〈小さな動脈〉を経由するか、そのうえで〈動脈〉に戻るか、後者がたんに端から〈動脈〉に導かれるかにあつたわけである。ただし注意すべきは、ここにみた〈動物精気 (細かな粒子)〉の分析にあつて、〈細かな粒子〉が本稿冒頭の「まず一」にはじまる段落での〈動物精気〉の流れを補足し得るにせよ、〈動脈〉に戻つたなかにて、〈粗い粒子〉と〈混ざ〉ったりしないが、しかしときに〈粗い粒子〉と同時に、ときに単独に流れたりすると指摘できるほか、両方の〈粒子〉とも筆者のいう「遠心的」な流れにおいて、〈筋肉〉や〈身体のすべての部分〉に達するであろうということである。

それでも〈動物精気〉の「遠心的」な流れはどこから生じると捉えられるのか。換言すると〈動物精気〉の「求心的」な流れと「遠心的」な流れと断じ得る分岐点は奈辺にあるかなのである。デカルトは脳内の〈腺Hのまわりに〉ある〈動脈〉に〈小さな動脈 (小枝)〉を接続させ、この〈小枝〉によって〈腺H〉が〈支えられる〉と述べる (引用文<sup>⑩</sup>参照) が、筆者はまさに〈動脈〉から〈小枝〉が分かれ出る〈動脈〉の前後にこそ、分かれ目を設定しておくのである。もとより〈動脈〉が〈小枝〉とつながれるところまでの〈動物精気〉の流れが「求心的」な流れとなり、〈小枝〉と接した〈動脈〉と〈小枝〉からは、〈動物精気〉が「遠心的」に流れるとみておかざるを得なくなるし、さらにその「求心的」な流れにあつては、たとえば身体の感覚なる能力を〈混〉ぜた〈動物精気 (血液)〉が〈小枝〉の現出をして〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉の各〈血液〉に分離せしめられるまで、これらの〈粒子〉は〈血液〉にいっしょに含まれるのか (つまり両〈粒子〉が〈混ざ〉っているのか、それともおのおの個別にあるのかは後段で明らかにする) と問われる。何しろ〈小枝〉に向かわない、〈動脈〉中の〈血液の粒子〉は〈粗い粒子 (動物精気)〉でしかなくとも、〈小枝〉に入る〈細かな粒子 (動物精気)〉と同じように、「遠心的」な流れになつ

ていなければならなかったとしてもである。

そこで、〈sentir〉が身体の感覚に働きかけると、その感覚 (sens) が sentiment となるのはどうしてかを質す前に、前段の括弧内に掲げおいた問題を片付けておく。それは、〈動物精気 (血液)〉の「求心的」な流れにおける、脳の入口前後と、脳内の〈動脈〉に〈腺口〉の〈小さな動脈〉が接続するその分かれ目までとあって、筆者がときに使用している〈混ざる〉や〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉なる表現は、いったいどのように理解され得るかという問いである。これに答えるに、【情念論】中の以下のいくつかの引用文が参考になろう。

⑤ La raison qui fait qu'elles (les plus vives et plus subtiles parties du sang) y (aux cavités du cerveau) vont plutôt qu'en aucun autre lieu, est que tout le sang qui sort du cœur par la grande artère prend son cours en ligne droite vers ce lieu-là, et que, n'y pouvant pas tout entrer, à cause qu'il n'y a que des passages fort étroits, celles de ses parties qui sont les plus agitées et les plus subtiles y passent seules pendant que le reste se répand en tous les autres endroits du corps. Or, ces parties du sang très subtiles composent les esprits animaux. <sup>(68)</sup> (括弧内は筆者)

血液のもっとも活発で細かな粒子が(脳の)他のどんな部位にも行かずに、脳の凹みに達するという結果をもたらす理由は、(大)動脈によって心臓から出るすべての血液が脳の凹みの方にまっすぐ流れるが、(脳の凹みの)入口 (passages) があまりに狭いために、そこに全部入ることが不可能なのである、(つまり)血液の粒子のうち、もっとも活発で細かな粒子だけがその(脳の凹みの)入口を通り、残り(の粒子)は身体他の場所に広がることにあるからである。ところで、血液のこの非常に細かな粒子が動物精気をつくる。(括弧内は筆者)

註(68)において、まず一に、血液がすべて〈心臓から脳へとのはる〉<sup>(69)</sup>「求心的」な流れに従うことが明かされる。血液が〈脳へとのはる〉は〈心臓〉から出る〈大動脈〉によってであるし、〈大動脈〉は〈心臓〉の〈熱〉<sup>(70)</sup>を、別の表現では、〈心臓〉からする〈非常に純粋な炎〉<sup>(71)</sup>を起因にして、血液すなわち〈動物精気〉<sup>(72)</sup>を流すとある。また一に、血液の〈細かな粒子だけ〉が〈脳の凹

みの入口を通ると語られるは、脳（内）では、〈脳の凹み〉が最初にその〈動脈（ここは大動脈ではない）〉とかかわり、〈動脈〉が〈脳の凹み〉のなかに引き入れられる<sup>(73)</sup>ことを示唆させる。ただし、「求心的」な流れにある〈動脈〉は〈脳の凹み〉にあって、〈その入口〉<sup>(74)</sup>をして〈狭い×動脈〉たらしめると記される。〈脳の凹み〉の〈動脈〉が〈狭い×入口〉のせいで、そこを通すは〈粗い粒子〉ではなく、〈細かな粒子〉でしかないとみなされるわけである。そして一に、〈脳の凹み〉に入らない〈残り（の粒子）〉は〈粗い粒子〉にはかならずなく、〈脳の凹み〉に入るのとは違う別の動脈を流れる以外にならなくなるとみることができると言える。だから引用文⑤中の〈残りは身体の他の場所に広がる〉というこの〈場所〉は、〈動脈〉の通過する〈脳の凹み〉以下の各部位（後述）を除く、およそ「別の動脈」にかかわるとみられる脳（身体）の〈他の場所〉や、そこから〈神経〉<sup>(75)</sup>に頼らずとも、「別の動脈」だけで流れゆくであろう、前記した〈筋肉〉と〈身体ですべての部分〉（という場所）をも該当させるにちがいない（だがデカルトは、脳の〈他の場所〉はどこか、これが〈筋肉〉や〈身体ですべての部分〉といかにつながるかなどを明記していない）し、かつ〈粗い粒子〉たる〈残り〉は、別言すると引用文⑤にあっては、身体の感覚ばかりか、身体の想像という各能力すらもいまだ混ざることをさせはしないとみえる血液は、いったん〈身体の他の場所〉に流れたあと、再び〈心臓〉に、さらに〈心臓〉から出る〈大動脈〉を通して、「別の動脈にかかわる脳の〈他の場所〉」へと何度も〈循環〉せざるを得なくなろう。

それにしても〈（大）動脈〉中の血液に対して、〈混ざる〉ということは何かである。〈混ざる〉とはたとえば、生まれつきの血液に次なるものが加わることである。

⑤Comme on voit en ceux qui ont bu beaucoup de vin que les vapeurs de ce vin, entrant promptement dans le sang, montent du cœur au cerveau, où elles se convertissent en esprits...<sup>(76)</sup>

葡萄酒を多量に飲んだ人たちにみられるように、葡萄酒の蒸気が素早く血液に加わって（混ざって）、心臓から脳へのほり、そこでこの蒸気は動物精気に変わる...。（括弧内は筆者）

このほか、〈viandes (食物)〉を例にして前記した〈食物の微細な粒子〉<sup>(77)</sup>も血液に〈混ざる〉ことで、血液をして〈栄養を取り、成長する原理〉たらしめる役割に資するのである。〈蒸気〉や〈食物〉がそれぞれ血液に〈混ざる〉都度、デカルトは上記引用文<sup>(78)</sup>で〈血液 (のこの非常に細かな粒子) が動物精気をつくる〉<sup>(79)</sup>と述べるように、同<sup>(78)</sup>でも〈そこでこの蒸気は動物精気になる〉という。〈変わる〉が〈つくる〉の意味に等しいと捉えれば、〈動物精気をつくる (動物精気になる)〉ところは、<sup>(78)</sup>では〈もっとも活発で細かな粒子〉が脳で最初に出会う部位たる〈脳の凹み〉や、既出引用文<sup>(79)</sup>では〈この非常に細かな粒子は動物精気になるために、脳に (入るに) あって〉の〈脳〉と語られるからして、脳であることにちがいなからう。だから<sup>(78)</sup>の〈そこで〉の〈où (そこ)〉は脳の語を該当させてかまわぬわけである<sup>(80)</sup>。だが他方〈そこ〉は〈心臓〉に置換されても間違いとはいえない。なんとすれば、〈心臓から脳へとのぼる動物精気の... 発生〉<sup>(81)</sup>と記される以上、〈動物精気〉は血液の「求心的」な流れにおいて、〈心臓〉にて〈発生〉しよう血液をさすとみるのが可能であり、その血液は〈蒸気〉や〈食物〉のおのおのと〈混ざ〉ろうが、〈動物精気 (血液)〉に変わりがなところか、脳 (の凹み) まではむろんのこと、脳 (内) のことにかぎっていうと〈脳の凹み〉以降にさえ流れゆくことができるからである。

ただ上記したことで、〈混ざる〉という問題がすべて片付いたのではない。つまり血液に〈蒸気〉や〈食物〉が〈混ざる〉だけで、各〈動物精気 (血液)〉がつくられるとって済ませてはならない。筆者が論ずる認識論において、筆者はわけても身体能力 (感覚や想像) が血液に〈混ざる〉ことをもって、デカルトの記す〈動物精気をつくる〉との真意とみなすのかを、さらに血液が〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉に分かれるは何か〈混ざる〉度ごとにか、それとも〈混ざる〉以前からなのか<sup>(82)</sup>を質さねばならない。ここでは論述の都合上、後者を先きに語ることとし、前者の問いについては後段以降に譲らざるを得ない。なるほど「血液は... 血漿と有形成分 (細胞) の二つの部分から成り、両者は... 分離されている (傍点部分 (省略) は筆者)」<sup>(83)</sup>とみなされても、例の〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉は、この二つの各部分に応じた分離ではあるまい。だから「生まれついで血液」さえも、〈混ざる〉以前から二つの〈粒子〉に分けられていると断じるのは不可能なのである。〈混ざる (se mêler)〉<sup>(84)</sup>とは繰返

すが、たとえば上記の「生まれついで血液」に、〈蒸気〉や〈食物〉の何かを混合（淆）することである。そこで筆者は既出引用文<sup>(85)</sup>を、つまり〈この非常に細かな粒子は動物精気となるために、脳に（入るに）あって血液の細かくはない（粗い）粒子から分けられる〉を再度持ち出すことで、後段以降に譲るとした前者の問題がかかわってくるように、何か（それは身体的能力であった）の混合（淆）が生じて、その度に血液が二つの〈粒子〉に〈分けられる〉とみる。換言すると〈細かな粒子〉が〈脳（これは〈脳の凹み〉であった）〉に入っただけでは、何かの混合（淆）がみられるかに答えを出すことが、〈動物精気をつくる〉との真意を明らかにさせる、前者の問題に相当しようということである。

前者の問題に関して、ここはまず、〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉と註(83)のことを問うだけにし、両者の関係を次のごとく捉えおく。すなわち「生まれついで血液」の例でいうと、デカルトはこの血液が「血漿」と「細胞（または血球）」で構成されると指摘するであろうほか、何か〈混ざ〉っては、血液が「血漿」と「血球」をともに含んだ〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉に初めて〈分けられる〉と見立てる、しかも再びいうが、「生まれついで血液」が〈脳の凹み〉の前の〈大動脈〉や〈動脈〉において、ときに〈蒸気〉を、ときに〈食物〉を「混合（淆）」させる以上、血液は当然〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉を有しながら、さらに〈脳の凹み〉後の〈動脈〉を流れるであろうと推察せずにおれない。筆者はすでに、一方では〈細かな粒子〉が〈脳の凹みの入口〉にかかわる〈動脈〉を介在して、他方では〈粗い粒子〉が〈脳の凹み〉とは関係しない「別の動脈」を介在して流れると記したばかりか、〈細かな粒子〉が通る〈脳の凹み〉にて〈蒸気〉や〈食物〉と異なる「混合（淆）」が可能になる、とどのつまり身体感覚や想像という各能力が〈細かな粒子〉と〈混ざる〉ことになるといった。それゆえこの血液は、〈細かな粒子〉だけの構成でなくなってしまう、要は〈細かな粒子〉が身体各能力と〈混ざる〉ことで、血液は新たに〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉をつくり出しては、二つの各〈粒子〉に〈分けられる〉のであり、とくに筆者がデカルトの認識論を語るうえで欠かせない、〈蒸気〉や〈食物〉の各「混合（淆）」での〈動物精気〉と相違した、〈動物精気をつくる（動物精気になる）〉<sup>(86)</sup>にふさわしい〈動物精気〉であるということである。それに身体各能力が〈混ざる〉〈動物精気（血液）〉は、今問うている〈脳の凹み〉から、次いで〈孔〉へ、そして〈腺口〉へと「求心的」に流れゆ

く<sup>(87)</sup>、まさに〈脳の凹み〉より〈腺H〉までの〈脳〉内の〈動脈〉をばかの〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉とで満たすことを含ませてくるが、しかし〈脳本体〉(後述)を除く各部位に達する度に、〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉のうちのいずれかが各部位に関連することを質さずにいないと後段で知り得るはずである(筆者が前記して明らかにした通り、たとえば〈脳の凹み〉や〈腺H〉は〈細かな粒子〉と関係したのである)。

とまれ〈細かな粒子〉にしろ、〈粗い粒子〉にしろ、それぞれの〈動物精気(血液)〉は「もの、液体」<sup>(88)</sup>とされる「血漿」と「血球」を含むかぎり、デカルトが以下で〈corps〉や〈matière〉と記すのを待たずとも、物体(物質)でしかないことが確認されねばならない。

②7 Ce que je nomme ici des esprits ne sont que des corps, et ils n'ont point d'autre propriété sinon que ce sont des corps très petits et qui se meuvent très vite...<sup>(89)</sup>

私がここで動物精気と名付けるものは、物体に他ならないのであり、微小で、非常に素早く動く物体である以外、いかなる特性も有することはない。

上記〈微小で、非常に素早く動く物体〉から、まず〈微小な物体〉とは〈細かな粒子〉をさすことを、また〈細かな粒子〉はたとえば後記引用文②9中の〈脳...にあるとき〉、身体<sup>(90)</sup>の能力をも加えた〈細かな粒子〉として(②7は〈LES PASSIONS DE L'ÂME (ART 10)〉が〈細かな粒子〉たる血液を脳に流入させる内容を有するが、その一を構成する)、〈脳〉内の各部位とかかわらずにおれないことを、だからこそこの〈細かな粒子〉がデカルトにとって、特筆すべき、あるいは真意たるべき〈動物精気〉になることを、そして〈非常に素早く動く物体〉すなわち〈動物精気〉とは既出引用文<sup>(91)</sup>に〈vent (風)〉や〈flamme (炎)〉と、さらに後記引用文②9に〈air (空気)〉という表現で記される各〈物体〉に等しいことを明かすと、かつ以上を含めた〈動物精気〉がその〈特性〉とならずして、何を示唆させるかといえるわけである。

②8 Ce n'est qu'une même matière qui compose le sang pendant qu'elle est dans les veines ou dans les artères, et les esprits lorsqu'elle est dans le cerveau, dans les nerfs

ou dans les muscles, ...<sup>(92)</sup>

物質が静脈や動脈にあるときは血液になり、物質が脳、神経、筋肉（のなか）にあるときは動物精気になるのは、同じ一つの物質なのである。（括弧内は筆者）

ここにいう〈matière（物質）〉はむろん、引用文⑳の〈corps（物体）〉に相当してこよう。すなわち〈物質〉は、〈物体〉が〈動物精気〉であり、〈細かな粒子〉たる血液であったがゆえに、そのうえ同㉑において〈血液〉と〈動物精気〉は〈同じ一つの物質〉であると指摘されたがゆえに、〈物体〉と同意になるのみか、〈血液〉のことさえもはや〈動物精気〉と名付けて間違いはないのである。ただ同じ〈物質〉と命名されるにせよ、その〈物質〉の中味を引用文㉑の通り、分けて記すのだから、そこには何かしかの違いがみえるように察知される。要するに筆者は、身体能力が〈脳〉で〈血液〉と〈混ざる〉際に、デカルトはこれを身体能力の含有した〈物質（血液）〉としての〈動物精気〉とみなし、身体能力を加えないで、もっぱら〈栄養を取り、成長する原理〉に従っている〈物質（血液）〉としての〈動物精気〉を区別したと捉えさせずにおかないのである。

この後者での〈血液〉は〈脳〉へは〈心臓〉から「求心的」に、〈脳〉からは「遠心的」に流れて、〈静脈や動脈〉を〈循環〉しよう〈物質〉でしかない一方、前者での、〈脳〉で〈血液〉と〈混ざる〉以前の身体能力は「求心的」な〈神経を介して〉<sup>(93)</sup>〈脳（の凹み）〉に達するばかりか、この〈脳〉で〈混ざる〉以後にあって、他の〈脳（〈孔〉や〈腺H〉と〈脳の中樞部位〉）〉で産出し表出されたりする能力は、別言すると筆者に〈孔〉の産出表出能力を除いて語られよう、精神の能力としてのいくつかはおのずから、「遠心的」な〈神経に依存して〉この〈脳（精神）〉より〈筋肉〉や〈身体すべての部分〉に伝達されざるを得ない、これこそ引用文㉑で彼が強調してやまないし、筆者をもして真意に値いさせよう能力の〈動物精気〉をば〈物質〉にするほかなくなるわけである。繰り返すが、彼が「遠心的」な〈血液〉の流れにおいて、〈同じ一つの物質〉が〈静脈や動脈にあるときは血液（血液が〈動物精気〉に置換されるとは前記した）になり〉、わけても諸能力の「遠心的」な〈神経〉での伝達において、

〈同じ一つの物質（精神の諸能力）〉が、〈脳、神経、筋肉にあるときは（彼はここで上記のように〈血液になる〉とした表現ではなしに）動物精気になる〉と書いたのは、彼が強調せんとするがためであったと捉え得るからである。さらにそこからはじめて、筆者が前記引用文⑳の〈そこで〉の〈そこ〉に提示した解答は限定されて、〈脳〉と受け取られる以外になくなるといわねばならぬ。

それでは「遠心的」な〈神経〉による〈動物精気〉があるとする文章を続けて引用しておく。

⑳ On sait que tous ces mouvements des muscles, comme aussi tous les sens, dépendent des nerfs, qui sont comme de petits filets ou comme de petits tuyaux qui viennent tous du cerveau, et contiennent, ainsi que lui, un certain air ou vent très subtil qu'on nomme les esprits animaux. <sup>(91)</sup>

筋肉運動や感覚のすべてが神経に依存しているし、神経はすべて脳から出る細糸や細管のごときのものであって、（神経（あるいは細糸や細管）内には）脳と同じく、非常に細かなある空気や風を含み、動物精気と名付けられることが知られている。（括弧内は筆者）

本文上記で、またその註(90)や註(93)の註欄で触れた通り、引用文⑳中の〈神経〉は指令を受けずに起動しない〈筋肉運動〉と、かつ〈脳から出る〉とも記されるかぎり、「遠心的」な〈神経〉をさすことになる。その〈神経〉を伝えるは〈非常に細かなある空気や風〉であり、かかる〈ある空気や風〉さえも、デカルトは〈動物精気〉と呼ぶ。㉑はだから、〈ある空気や風〉たる〈動物精気〉が「遠心的」な〈神経〉によって〈筋肉〉や〈身体すべての部分〉に伝達され（運動）を起こしすらすることを明かす引用文となる<sup>(95)</sup>。

しからばその〈動物精気〉は何んであろうか。これは〈ある空気や風〉をどう読むかにかかってこよう。〈風×炎×空気〉はすでに〈動物精気〉と断じたし、〈物体（物質）〉であった。引用文⑳に〈物質が脳、神経、筋肉にあるとき〉と書かれる〈物質〉こそ、㉑では〈ある空気や風〉でなければならぬ。〈ある空気や風〉はしかし、〈血液〉のみの〈物質〉では毛頭ない、しかも何かを〈血液〉に含ませた〈物質〉ですらなくさせる。「何か」は、㉑の例でいうと、〈感

覚 (sens)<sup>(96)</sup> なる能力であると受け取り得る (以上が〈血液〉のみも、能力を含んだ〈血液〉も〈空気や風〉たる〈物質〉であるし、能力だけの〈ある空気や風〉たる〈物質〉も〈同じ一つの物質〉と語られるゆえんである)。それでもこの能力は最初から、〈神経〉にあるわけではない。〈脳〉(内)においては、能力は何より〈血液〉にふくまれてあるばかりか、この能力を含んだ〈血液〉は「求心的」に、あるいは「遠心的」に〈脳〉の〈動脈〉を流れるだけであって、「求心的」な〈神経〉はむしろのこと、「遠心的」な〈神経〉を伝わるなどはないということなのである。こうした〈血液〉さえ〈神経〉を伝わるとみるならば、どうして〈静脈や動脈〉があるのかとなろう。とまれこの段落では、〈ある空気や風〉たる〈物質〉は〈動物精気〉であり、この〈動物精気〉は〈神経〉を通るのだから、もはや〈血液〉のみにや、能力を含んだ〈血液〉にでもなしに、「能力」に限定して用いられねばならぬことを知るべきである。

そこで筆者は、能力が〈脳から出る〉際に、「遠心的」な〈神経〉を伝わりと理解するにせよ、再度既出引用文<sup>(97)</sup>を参照すれば、〈脳から出る〉以前の〈脳〉(内)にあって、つまり〈脳本体〉という部位にあって、能力は〈血液〉とともに、〈脳本体〉の〈動脈〉を流れる一方、〈脳本体〉のこの〈孔 (pore)〉まで達したときに、「遠心的」といってよい〈神経〉に入ることを、同時に「遠心的」な〈神経〉は、〈血液〉の「遠心的」な流れが〈腺H〉を目の前にした〈動脈〉と〈小さな動脈〉との分かれ目以降にはじまるとみると同様に、〈脳本体〉の〈孔〉につながる〈神経〉からはじまることを、だからここでいう〈脳本体〉は上記註(97)中の部位〈脳の凹み〉にあって、ときに「求心的」に流れたり、伝わったりするそれぞれの〈血液 (動脈)〉や〈神経〉が各自、最初に〈脳〉で接続されると語られる部位ではないことを、さらに筆者が「求心的」な〈動脈 (血液)〉や〈神経〉の各場合であれ、「遠心的」な〈動脈 (血液)〉や〈神経〉の各場合であれ<sup>(98)</sup>、おのおのに関連しよう〈脳の凹み〉や〈脳本体〉とをいっしょにして〈脳の中樞部位〉と捉えていたことを確認しておかねばならない(〈脳の凹み〉と〈腺H〉の上部に〈脳本体〉がある)。

註(98)の註欄に指摘した通りの、〈脳の凹み〉や〈脳本体〉では、「遠心的」な〈血液〉の流れは〈腺H〉以降、〈脳の凹み〉から〈脳本体〉への順となす、「遠心的」な〈神経〉の伝達は〈腺H〉以降、〈脳本体〉から〈脳の凹み〉への順となすように受け取られるほかなくなる。しかし、こうした〈血液〉や〈神

経)の各「遠心的」な流れと伝達が二つの部位間で同じ方向に流れ伝達されねばならぬにもかかわらず、〈血液〉の流れがまるで〈脳(の凹み)へのほり、さらに〈脳本体〉へと到達する「求心的」な流れなる異方向にあるがゆえに、この〈血液〉は二つの部位間にあつて、相異なる方向への流れを有してしまう。だから両方を両立させる表現が必要であり、それが〈脳(の凹み)と〈脳本体〉を一つにして〈脳の中樞部位〉という表現となる。だが〈腺H)以降のことは「遠心的」な〈血液〉の流れとみるにせよ、これが〈脳本体〉から〈脳(の凹み)へをさす流れではなく、その逆たる〈血液〉の流れと捉えられるのはなぜかが問われる(後述)。それにもましてこの表現は「遠心的」な〈神経〉を語る際に有効である。なんとすれば、既出引用文<sup>(99)</sup>をここに持ち出し読むと、デカルトが〈理性的精神〉を〈脳の中樞部位〉とだけ書き込むことは、〈理性的精神〉を〈脳(の凹み)や〈脳本体〉なる個別の部位と捉えさせないばかりか、〈脳の中樞部位〉こそ「遠心的」な〈神経〉や諸能力の出所となることを示唆せずにおれないからである<sup>(100)</sup>。その指摘のもとではじめて、かの既出引用文<sup>(101)</sup>にみられる諸能力が〈理性的精神(脳の中樞部位)〉に帰属し活かされることが、また次段落に記す新たな諸能力が「遠心的」な〈神経〉を通らずして(だからかかる〈神経〉とかかわるのはこの新たな諸能力となる)、〈筋肉〉や〈身体のすべての部分〉に伝わらないことが明確になる。

デカルトが註(100)の〈cervcau)で狙いとするときこの語を〈脳の中樞部位〉と置き換え、その置換語においてさらに留意すべきは、諸能力(facultés)たる語が三つにわたることである。すなわち、〈脳の中樞部位〉が彼によって〈理性的精神〉と名付けられること<sup>(102)</sup>から、その精神に所属するしかなくなる、上記註(101)の諸能力が、また前記註(97)に語られよう、〈脳本体(理性的精神)〉内の〈神経に入る〉諸能力が、そして〈脳本体(理性的精神)〉での〈神経に入る〉この「遠心的」な〈神経〉を仲立ちにして、前者の〈理性的精神〉の諸能力それぞれの、後者の〈神経に入る〉諸能力おのおのへの働きかけがあり、新たな諸能力を表出するところでこの諸能力がそうなのである。各「諸能力」はその修飾語句に従った通りの諸能力であるがゆえに、同じでないのはいうまでもない。そこで再度新たな諸能力とは、かつその成り立つ経緯とは何かを確認しておく、新たな諸能力の一には、感覚による〈情念(passion)〉が該当してくるし、この経緯はまた以下に記すごとくにある。とどのつまり、〈思惟する原

理)を束ねる〈理性的精神〉の諸能力の一たる〈意志する(vouloir)〉が上述通り、「遠心的」な〈神経に入る〉諸能力(感覚による〈情念〉のことを質すのだから、ここでいうその一は感覚となる)に働きかけることによって、〈情念〉なる新たな能力が、これを前記した語で繰返すと、新たな能力としての〈ある空気や風〉が、または新たな能力としての〈動物精気〉が〈理性的精神(脳の中樞部位)〉で表出するということである。さらにこの表出能力は〈筋肉〉や〈身体すべての部分〉に伝わるために、「遠心的」な〈神経〉を経出し、〈脳の中樞部位〉である〈脳本体〉と〈脳の凹み〉とをこの順にて、〈脳から出る〉ことになる読み得る(読みの証明はデカルトの引用文を提示する次号に譲る予定であるし、この〈情念〉こそ本論冒頭の「能力」に充当する)。

それでも三つの「諸能力」なる語のうち、最後に残った、〈脳の中樞部位(脳本体)〉内の〈神経に入る〉諸能力は何かである。前段に掲げた感覚を一例にすれば、何かは順次、次のようにまとめられるなかで導き出せるであろう。まず感覚は、〈腺H〉に關した本稿引用文⑳に従っていうと(㉑の本格的分析は次号で本文以下の見方を踏まえて試みる)、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉での産出能力のことを示唆させる。次に感覚は〈腺H〉内の〈細糸〉に伝えられるが、しかし㉒での訳出通り、その〈(細糸が㉑の〈結合したり、からまったり〉せずに)互いに離れていてはわずかしか揺さぶられない〉ところに関係するばかりか、〈腺Hから出〉て〈動脈〉に戻る感覚なのである。ここにまた引用文㉓を参照すると、これで〈腺H〉内の〈細糸〉も〈神経〉であることが、他方上記した〈動脈〉は「遠心的」な〈血液〉を流し、かの感覚の方はかかる〈血液〉に含まれたまま、〈動脈〉をおよそ内に有する〈脳本体(脳の中樞部位)〉へとどくことが間違いなくなる。そして〈脳本体〉での「遠心的」な〈血液〉の流れにあって、再度いうが、〈血液〉に含まれていた感覚が〈脳本体〉内を出所とする「遠心的」な〈神経〉との出会いから、すべて常時といわずとも〈神経に入る〉ことができるのであり、かつ〈神経に導<sup>(100)</sup>かれるは、身体の感覚(sens)でなしに、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉で身体的能力として産出した「能動的」感覚(sentiment)で(ちなみにこの〈神経に入る〉想像の方は何かといえば、これは身体の想像や精神としての「たんなる想像」ではもはやなく、身体としての「悟性)を手助けする想像」や「情念)になる想像<sup>(100)</sup>で)なければならないといえるのである。その「遠心的」な〈神経〉では、これもすでに指摘

したごとく、今度は〈理性的精神〉の、〈感じる (sentir)〉と〈想像する (imaginer)〉以外の、それにこのおのおのが「時間的経過」にあっても働きかけ得るとみる以外の諸能力、たとえば〈意志する (vouloir)〉が上記した身体としての各能力に働きかけては〈情念 (passion)〉のみか、〈意志 (volonté)〉なる新たな各能力を表出し、この新たな能力は〈脳から出る〉、すなわち「遠心的」な〈神経〉の場合においては、デカルトが註(103)で示唆させるように、〈脳本体〉を経て〈脳 (の凹み) から出る〉ことで、あるいは筆者が〈脳本体〉と〈脳 (の凹み)〉をいっしょにして語らせる〈脳の中樞部位〉という〈脳から出る〉ことで、それ自身 (〈意志) を一例にしては〈意志) 自身) を行動に移すべく、〈筋肉) や〈身体 (のすべての部分) に伝えるわけである。

ただし筆者の前段での見方に対しては、以下のいくつかの注意が必要となる。何よりもまず、〈脳本体〉の〈神経に入る〉「能動的」感覚は、この〈脳本体 (脳の中樞部位)〉に立ち寄る以前にあった〈腺H) なる部位での、〈腺Hの表面〉に描かれる (表出する) 表象<sup>(106)</sup> にならないと知ることが肝要なのである。デカルトが一般にいう〈腺H) での「能動的」諸能力は、〈腺H) 内の〈小さな動脈〉にて身体 (の) 感覚 (sens) や身体 (の) 想像 (imagination) が〈理性的精神〉の〈sentir) や〈imaginer) の各働きかけ<sup>(106)</sup> をそれぞれ受けて産出し<sup>(107)</sup>、さらに註(107)に記した諸能力の一が〈腺H) 内の〈細糸〉に伝わり、その〈細糸〉にて〈細糸が結合したり、からまったり〉してから、〈腺Hの表面〉に表出して (これはいまだ詳述していない) 成り立つ能力<sup>(108)</sup>であったが、しかしこの能力が〈腺H) 内の〈細糸〉に伝わっても、〈細糸が結合したり、からまったり<sup>(109)</sup> しない「能動的」感覚であるならば、「能動的」感覚は〈腺Hの表面〉に表出するは不可能であり、おそらくは〈腺H) の、「結合したり、からまったりしない」〈細糸〉から出る、別言すると〈細糸が互いに離れてははわずかしか揺さぶられない<sup>(110)</sup> 〉〈細糸〉から出る、要は〈細糸〉を経由する〈腺Hから出る<sup>(111)</sup> 〉といえようし、この「能動的」感覚がそこから、「遠心的」な〈血液〉の流れる〈動脈〉に戻ってその〈血液〉に含まれたまま、〈動脈〉が「遠心的」に結ばれる〈脳の中樞部位 (脳本体)〉と関連せずにおれなくなろうということにある。

さらに前段までに訳出した語のうち、〈小さな動脈〉と〈細糸〉には注意が必要である。前者の訳語は次の引用文から導き出せる<sup>(112)</sup>。

⑳ Considérez, outre cela, que la glande H est composée d'une matière qui est fort molle, et qu'elle n'est pas toute jointe et unie à la substance du cerveau, mais seulement attachée à de petites artères... et soutenue comme en balance par la force du sang que la chaleur du cœur pousse vers elle. <sup>(113)</sup>

これに加えて、腺Hは、とても柔らかい物質でつくられており、脳本体と完全に結びついてはいないが、それでも小さな動脈につながれ、心臓の熱が腺Hの方に押しやる血液の力によって、まるではかりにのせられているように支えられていることを考察あれ。

引用文中の〈小さな動脈 (de petites artères)〉と〈細糸 (les petits filets)〉の各語は複数形である。しかもこれまでに述べてきた通り、後者の〈細糸〉は前者の〈小さな動脈〉に接続しよう〈神経〉としてかかわっている。そこではだから、各一本以上の〈細糸〉が複数の各〈小さな動脈〉に対応するということができる。しかしなおもここに付け加えねばならぬのは、〈小さな動脈〉で産出(誕生)するばかりか、〈腺Hの表面〉に表出する「能動的」感覚や「たんなる想像」の諸能力おのおのが同時に、〈腺H〉(内の)〈小さな動脈〉から〈細糸〉に伝わり、〈腺Hの表面〉に表出することはない、またたとえば「能動的」感覚が「たんなる想像」とその産出や〈細糸〉への伝達において、同時にでなく、別のときであるとみるにせよ、この〈細糸〉をば今度も同時に、〈結合したり、からまったり〉させることはないということである。

なぜか。それは既出引用文<sup>(114)</sup>が本稿引用文⑳に語られる〈腺H〉自体をさらに、〈想像と共通感覚の座〉とも表現し、あたかも二つの〈座〉に分類させるところにあると察知し得るからである。〈腺H〉が二つの〈座〉に区別されるとするデカルトの真意は、筆者のみるところ、当初より〈腺H〉が二分割され、各〈座〉をいわゆる「部位」として有するのではなく、〈腺H〉全体がときに〈想像の座〉、ときに〈共通感覚の座〉になると捉えたことを措いてないであろう。「ときに」という見方を取る方が正しいのは、繰返すが、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉に身体の想像や身体が感覚が導かれたり、その身体の各能力に〈理性的精神 (脳の中樞部位)〉の〈想像する〉や〈感じる〉各能力が(だから身体の想像には〈想像する〉が、身体が感覚には〈感じる〉が)働きかけたり、

その結果そこで諸能力が産出したり、さらにこの諸能力は〈細糸〉に伝わるにしても、その二つの能力だけが〈腺Hの表面に描かれ（表出し）〉たり<sup>(115)</sup>することが「同時に」ではない、つまり上記中の身体の各能力と〈想像する〉や〈感じる〉ことを例にとっていうと、身体の各能力が同時に導かれたり、〈想像する〉や〈感じる〉が同時に働きかけたりすることはないからである。だから筆者が本稿註(114)の既出引用文に従わんとするかぎり、たとえば彼が〈感じたりする〉という〈感じる〉が働きかける「ときに」をもって、この内側と「表面」を含ませたところで彼に語らせる〈腺H〉をして、筆者は〈共通感覚の座〉たらしめることになると思まなければならないのである。それは、彼がわけてもその既出引用文⑤にて、〈理性的精神が何らかの対象（身体の感覚）を…感じたりするときに〉、この身体の感覚が〈感じる〉の働きかけ（能動）を受けて「能動的」感覚たる〈表象〉となるは、〈共通感覚の座である腺Hの表面に〉おいてであると記すからである<sup>(116)</sup>。

またデカルトが〈座〉に対し、〈共通感覚の座〉と命名し、〈想像の座〉の方をばそれでも「共通想像の座」と名付け得なかったのは何ゆえなのか。すでに触れた通り、身体の感覚には〈外的感覚（五感）〉や〈内的感覚（内臓感覚）〉があることから、かつ両方の感覚が〈腺H〉にかかわらずにいない場合があることから、彼はおそらくこの〈共通（ともに）〉を意識して、〈腺H〉を〈共通感覚の座〉と捉えていたとみるのに比べ、彼は身体の想像の方に「外的想像」や「内的想像」という名称の区別を明確にしなかったことにあるのが、〈想像の座〉の名にとどまる理由になろう。だから〈共通感覚〉の〈共通〉とは〈外的感覚〉や〈内的感覚〉が〈腺H〉(内の〈小さな動脈〉)に「ともに」流れ、しかして両方がそれぞれ〈腺H〉に「ときに」関与することによって、〈腺H〉での感覚能力の産出（誕生）段階では、〈外的感覚〉や〈内的感覚〉のいずれもが「能動的」感覚になるに及んで、〈感覚〉を表現しよう修飾語と、さらにこうした名で呼ぶ〈座〉となろうが、しかし身体の想像や〈想像の座〉の方は、たんにのおのおのに呼ばれるにすぎないのであって、以上の「感覚」で語り得たようには見立てることができなくなるのである。

それゆえ筆者は上記した〈腺H〉にあつて、もはや身体ばかりか、精神<sup>(117)</sup>としての感覚や想像たる諸能力がそれぞれ産出や表出をする際も、〈腺H〉はその都度、感覚では〈共通感覚の座〉に、想像では〈想像の座〉に換言されると

解してよいことになる。だがこの産出諸能力のうち、〈細糸〉に伝わって、〈細糸が結合したり、からまったり〉しながらも、〈腺Hの表面に描かれる（表出する）〉諸能力は、感覚では「能動的」感覚の一と、想像では「たんなる想像」という二つの精神としての能力だけにかぎられることが確認されていなければなるまい。そうであっても、たとえば〈腺H〉なる〈共通感覚の座〉における「能動的」感覚はこれまた、〈細糸が結合したり、からまったり〉する両〈有り様〉をもって、ときに〈腺Hの表面〉への表出につながるとみることが可能なのか。否と答えるしかない。そこで筆者は、この「能動的」感覚は〈細糸が結合する〉場合か、それとも〈細糸がからまる〉場合かのどちらかによらねばならぬし、そのいずれかによってこそ、二つの能力中のかかる能力として表出すると判断する。とどのつまり、〈腺Hの表面に描かれる（表出する）〉能力が「能動的」感覚と「たんなる想像」の二つであるだけに、前者の能力が〈細糸が結合する〉場合を、後者の能力が〈細糸がからまる〉場合を条件にして、おのおのがその各「表出」にまでたどり得ようといえるわけである。

それは、〈細糸がからまる〉場合を例に取り上げていうと、〈細糸がからま〉って〈腺Hの表面〉に表出する「たんなる想像」は、まず上記からのことでは、当然〈腺Hが結合〉して成り立つ能力とは別の能力でなければならないことを、そして本稿註(114)の既出引用文のわけでも⑩を再度想起すれば、〈痕跡(表象)〉であるが、その〈痕跡が対象の現前に依存〉しないがゆえに、あるいは〈細糸がからまる×有り様〉はそれ自体〈多くの他の原因〉の一を構成するとみえるがゆえに、あるいはまた〈表象〉が〈sentimentの影や画〉であったと表現されるがゆえに、赤や黒と明確に捉えられる際の「能動的」感覚に比べて、多少とも不明な能力となるは結局は〈細糸がからまる〉せいではなくなることを示唆させずにおかないし、あわせて〈細糸〉が〈からまる〉や〈結合する〉各それ自体は、想像や感覚たる各能力の相違を効果的に打ち立てんとするにちがいないことを、さらにそれのみか、「たんなる想像」や「能動的」感覚の両能力がともに、〈細糸〉での〈結合する〉と〈からまる〉に関連してこないこと、およそ〈腺H〉なる〈座〉のそれぞれ異なる名称は必要ないことを物語らざるを得ないと捉え得るからである。

ところで〈細糸〉の〈有り様〉についていえば、前記した〈結合する〉や〈からまる〉というほかには、〈細糸が互いに離れてい〉るしかないことが注意

されなくてはなるまい。つまり〈腺H〉内の〈小さな動脈〉で産出した、たとえば「能動的」感覚が〈細糸〉に伝わるが、しかし〈細糸が互いに離れている〉場合、「能動的」感覚は〈腺Hの表面〉に「表出」しないとみておかねばならぬのである。これこそもう一つの「能動的」感覚といわれよう能力となる。そしてこのときかかる能力は「〈腺（H）〉という精神」の能力に帰するかどうかの確認されるべきなのである。このことに関し、筆者はすでに次のように語っておいた。すなわち、〈細糸〉において、〈細糸〉が「能動的」感覚を〈結合〉させ、「たんなる想像」を〈からま〉せることで、それぞれの能力が〈腺Hの表面〉に表出する際にこそ、各能力が「〈腺（H）〉という精神」の能力となるに反して、たとえば「能動的」感覚が〈腺Hの表面〉に表出しない、換言すると〈細糸が互いに離れている〉際には、この能力は〈腺H〉の「表出」能力とは当然みなされず、〈理性的精神〉で「表出」しよう「新たな能力」の素材になり得る（他方、「〈悟性〉を手助けする想像」や「〈情念〉になる想像」と筆者が名付けた、〈腺H（内の〈小さな動脈〉）〉での各産出能力も、上記の「たとえば」以降に記した「能動的」感覚の場合の経緯と同様になる）<sup>(11)</sup>と。

この経緯をさらに「能動的」感覚の例で語ると、〈腺Hの表面〉に表出しない「能動的」感覚は、〈腺Hから出〉て、つまり〈腺H（内の〈細糸〉から〈小さな動脈〉）に流れ込み、この〈小さな動脈〉につながる〈腺H〉の外の〈動脈〉へと戻って、まずは〈脳の中枢部位（脳本体）〉まで〈動脈〉を通してたどりつかねばならぬことになる。そこでその能力は再び〈血液〉に〈混ざる〉からして、たとえ〈腺H〉の産出段階での精神の能力か否か問えるにせよ、もはやそのように語られる内実を消し去ってくるばかりか、その能力に〈脳の中枢部位〉たる〈理性的精神〉のたとえば〈意志する〉能力が〈理性的精神〉内で働きかけて、今度はその能力をここでいう精神の「新たな能力」にするからして、その能力は〈脳本体〉における〈神経〉に入り、かの〈理性的精神〉の能力の働きかけを受けるまでは、精神の能力とみなされ得ないからである。要するに〈腺Hの表面〉に表出しない「能動的」感覚は、〈理性的精神〉たるこの精神にかかって、あるいはその「遠心的」な〈神経〉にかかわって、はじめて「〈腺H〉という精神」とは異なる精神の能力といえる能力になるということである。

さらに、〈脳の中枢部位（脳本体）〉でその〈神経〉に入る「能動的」感覚は何かである。これは〈粒子〉、〈物質〉あるいは〈動物精気〉である。だがこの〈粒

子は〈粗い粒子〉か、〈細かな粒子〉なのか。デカルトはそのいずれとも明言せずにいるが、〈粒子〉はおそらく、これが〈脳本体〉の〈神経に入る〉がために、〈細かな粒子〉（それはもとより「能動的」感覚なる能力）でなければならない。と同時に、〈神経に入〉った〈細かな粒子〉に、〈脳の中枢部位（理性的精神）〉の諸能力のそれぞれ（これも〈細かな粒子〉かは明確でない）が働きかけ、今度は〈理性的精神〉自身が「新たな（諸）能力」を〈理性的精神〉において表出し、かつ「新たな（諸）能力」がおのおの上記した〈細かな粒子〉を新たな〈細かな粒子〉（これも定かにしていない）として、〈脳（の凹み）から出る〉（〈脳本体〉の「遠心的」な〈神経〉は〈脳凹み〉のそれとつながっているとみる）「遠心的」な〈神経〉にも伝わる事が再度確認されねばなるまい。次いでながら、前文中での〈理性的精神〉の諸能力の働きかけに関して、かかる働きかけがない場合、「能動的」感覚（細かな粒子）はどうなると想定されるか質しおく必要がある。「能動的」感覚は〈脳の中枢部位（脳本体）〉内の「遠心的」な〈神経に入る〉にしろ、およそかかる働きかけを受けずば、その〈神経〉で消滅するほかに、これも〈脳の中枢部位〉に加えられよう（〈脳凹みから出る〉）ところの「遠心的」な〈神経〉にすら伝わらぬであろうと推察される（このことも彼にあっては不明のままである）。

ところがデカルトは、前段までに記しおいた能力の経緯とは異なるそれを取り上げる。それが本稿引用文②中の〈tous les sens（身体感覚）〉なる能力であり、その経緯なのである。するとこの②以降の段落にて筆者が述べる<sup>(119)</sup>通り、〈身体感覚〉なる能力は、〈脳から出る〉「遠心的」な〈神経〉に伝わり、〈身体すべての部分〉を〈運動〉させるといえた（その段落における〈筋肉運動〉と並置される〈身体感覚〉は〈筋肉〉が「指令」を受けて動くだけに、これと同様たる「遠心的」な〈神経〉の一を通してみておいた）。だがそれ以前に、この〈身体感覚〉は感覚器官から脳へのぼったし、その際には「求心的」な〈神経〉の伝達に従わなければならぬほか、〈腺H〉前の〈動脈〉と〈小さな動脈〉との「分かれ目」にあって、〈腺H〉に向かう〈小さな動脈〉には入らず、したがって〈腺H〉内の〈小さな動脈〉に対する〈理性的精神〉の〈感じる〉能力の働きかけを受けはせず、たんに〈動脈〉を流れゆくようになると捉えずにおれなかった。そしてかかる「分かれ目」直後の〈動脈〉と〈小さな動脈〉の各〈動脈〉をば、筆者は先きに「遠心的」な〈血液〉を流さざるを得

ない〈動脈〉になると指摘したが、前者でいう〈動脈〉についてさらに注意すべきは、その〈動脈〉は〈脳の中枢部位〉の一である〈脳本体〉でなくして、もう一つを構成する〈脳の凹み〉に向かうということなのである。だから〈身体感覚〉を流す〈動脈〉は、筆者が上記に「たんに〈動脈〉を流れゆく」とした「動脈」とみる以外になく、かかる「分かれ目」以後の「遠心的」に流れゆく〈動脈〉をして、〈脳の中枢部位〉に入る直前でその〈脳本体〉や〈脳の凹み〉の二方向に分かれさせる動脈の一でしかなくなってくる。このことは少なからず、既出引用文<sup>(20)</sup>が証明しているところである。

すなわちそこに、〈ある動物精気が脳の凹みに入るに従って、ほかの動物精気は脳本体にある多くの孔を通して出てゆき、これらの孔は動物精気を神経に、そして神経から筋肉に導く〉（註(120)の全訳）との引用文の場合にかぎり、まずは〈ある動物精気〉は〈tous les sens（身体感覚）〉の〈混ざ〉った〈血液〉と、〈ほかの動物精気〉はもう一つの「能動的」感覚の〈混ざ〉った〈血液〉と、次には〈身体感覚〉の〈動脈〉は〈腺Hから出る〉のであっても〈脳の中枢部位〉中の〈脳の凹み〉に向かうそれであり、もう一つの「能動的」感覚の〈動脈〉は、〈腺Hから出〉て動脈に戻ったのちに、〈脳の中枢部位〉中の〈脳本体〉に向かう、筆者がここに新たに名付ける「他の動脈」（これは前記した「別の動脈」とは違う）になると、そして各〈血液〉を流す各〈動脈〉は各「遠心的」な流れの〈血液〉にあっても、〈血液〉だからして〈粗い粒子〉と〈細かな粒子〉を含んでいると理解しておかなければならない。

そこで問題にした〈tous les sens（身体感覚）〉の方は、〈粗い粒子〉や〈細かな粒子〉のいずれにも組み込まれていようが、しかしこの〈動脈〉の〈血液（ある動物精気）〉が註(120)の引用文によると、〈脳本体〉にゆかずに、〈脳の凹み〉へと向かい（ここにゆかずに「別の動脈」を通る蒸気や食物もあった）、しかも〈脳の凹み〉に入ってどうなると記されるかである。註(120)の文章は上記の〈血液〉をもってはじまるにしても、すぐさま〈ほかの動物精気（血液）〉のことが書き込まれ続くにあっては、〈脳の凹み〉に入った〈ある血液〉のその後を推し量ることは困難であるし、デカルトはこの点を「不明瞭」のままにしたといってよいかもしれない。それでも筆者は、〈ある血液〉中の〈身体感覚〉はこれが〈脳の凹み〉に入っただけのち、その「遠心的」な〈神経〉に導かれるのではないかと察知する。「遠心的」な〈神経〉には、すでに筆者が〈脳本体〉を

經由し〈脳の凹み〉に伝わるようつながるそれがあると語っておいたが、しかし〈身体感覚〉が〈脳本体〉の經由なしにはじめて〈脳の凹み〉で出会う「遠心的」な〈神経〉は、前記したそれとは別の「遠心的」な〈神経〉である。要するに、〈脳本体〉と〈脳の凹み〉で構成される〈脳の中樞部位〉は筆者にとって、「遠心的」な〈血液〉を流す〈動脈〉を接続させるばかりか、「遠心的」な〈神経〉だけをはりめぐらす「部位」でしかないごとくに捉えられるということである。わけてもここで〈脳の凹み〉の「遠心的」な〈神経〉に関与するとみる〈身体感覚〉は、〈神経〉のことが問われくるために、その〈神経〉に〈細かな粒子〉を入れるしかなく、かつ㊟で〈神経はすべて脳から出る〉と書かれるために、この〈脳〉を〈脳の凹み〉とみなすことでは、そこから〈出る〉ことになるし、〈脳の凹みから出〉ては、〈脳〉の外の身体部分に伝えよう「遠心的」な〈神経〉と関係せざるを得なくなるわけである。

しかし筆者に、上記註(120)の引用文がおよそこれと類似した文体でしかならうと指摘された、〈この動物精気(血液)は脳の凹みに入るに従って、そこから脳本体の孔を通り、その孔から神経に入る〉という一方の引用文<sup>(121)</sup>に比べられると、後者の文章は〈そこから〉と記されるただ一点において、前者註(120)の引用文とはおのずから違わねばならぬのではないかと推察させる。たとえば後者での〈この動物精気〉をば、〈tous les sens (身体感覚)〉が〈混ぜ〉った〈血液〉と見立てると、後者の全文から、前者とはその〈血液〉が〈脳の凹みに入る〉ことで同意となるにせよ、おそらく〈そこ(脳の凹み)から×脳本体(の孔)へ「求心的」に流れることでは相違すると読み得る。この場合はしかし、〈血液〉中の〈身体感覚〉は〈脳本体の孔を通〉してはじめて、「遠心的」な〈神経に(細かな粒子として)入る〉ことになるし、そのうえ〈身体感覚〉がまた〈脳(の凹み)から出る〉にあっては、何より〈脳本体〉の〈神経〉から「遠心的」に〈脳の凹み〉の〈神経〉に伝えられなければならないはずである。だから註(121)の引用文は、〈身体感覚〉が、あたかも〈脳の凹み〉や〈脳本体〉なる〈脳の中樞部位〉内のそれぞれの〈動脈〉や「他の動脈」と〈神経〉の両方を「循環」することによって、ようやく〈脳(の凹み)から出〉て、〈筋肉〉や〈身体すべての部分〉にかかわろう、〈脳〉の外の「遠心的」な〈神経〉に伝わりと理解されるわけである。

だが両引用文がおのおの、類似した文体にもかかわらず、前段までのごとく

に捉えられるとなると、〈tous les sens（身体の感覚）〉は二つの伝わり方を有してしまう。すなわち〈身体の感覚〉は〈脳の中枢部位〉内において、註(120)では〈脳の凹み〉とだけ関与して、註(121)では〈脳の凹み〉と〈脳本体〉との間を「循環（往復）」して、〈脳（の凹み）から出る〉という伝わり方になると（註(121)の「循環（往復）する」表現例にならっていえば、註(120)の〈脳の凹み〉における〈身体の感覚〉は「循環（往復）しない」ことになろう）。そこでデカルトが註(120)の〈脳の凹み〉中に配置させる〈神経〉について何も語らずとも、本稿引用文②には〈神経はすべて脳から出る細糸や細管のごときもの〉と記す以上、かつ筆者がこの〈脳から出る×脳〉を〈脳の凹み〉と、しかも〈脳の凹み〉さえ「遠心的」な〈神経〉に満たされると断じていた以上、〈脳の凹み〉中の〈神経〉はこの〈脳（の凹み）から出る〉「遠心的」な〈細糸や細管（つまり神経）〉に接続するところの、〈脳の中枢部位〉内に多数はりめぐらされる「遠心的」な〈神経〉の一であるとみることができるのである。したがってこの〈神経〉を伝わる〈身体の感覚〉と、註(121)のまずは〈脳の凹み〉の〈動脈〉から〈脳本体〉の「他の動脈」へと、次いで〈脳本体〉の〈神経〉から〈脳の凹み〉の〈神経〉へと「循環（往復）」し（しかし二つの「部位」の各〈神経〉として記したそれは、「もう一つの「能動的」感覚」が伝えられる二つの「部位」の各〈神経〉とは別であるというべきである）、〈脳（の凹み）から出る細糸や細管〉なる〈神経〉につながる〈身体の感覚〉とをあわせると、二つの「部位」を含んでいう〈脳の中枢部位〉内での〈身体の感覚（の伝わり方）〉が二例に及ぶということになる。むろん二例における各〈神経〉は何一つ同じ神経ではないと捉えおく方がよからうが、それでも果たして二例が成り立つと容認し得るのかである。

筆者は、註(120)が『情念論』（1649年）の、註(121)が『人間論』（1630-1633年）からの出典であるという二作品の時間的へだたりによって、前者がたとえ後者の手本のもとに推敲されたとみなすにしても、後者とあまりに異ならせるは以下の理由にて当然のことであり、それゆえ二例をともに認めることは不可能なのであると断言しておかざるを得ないのである。要は註(121)において〈そこ（脳の凹み）から〉と書かれてくるかぎり、前文（従属節）の主語たる〈この動物精気〉が後文（主節）の主語としてかかる（もとより〈ils〉と記される）と、別言するとたとえば〈tous les sens（身体の感覚）〉が後文にも主語となっ

て関連すると読み得るのだから、註(121)には何んら、註(120)の〈ほかの動物精気〉に該当せしめ、筆者の主張しよう「もう一つの「能動的」感覚」が打ち出される余地などなくなるどころか、関係しなくなるということにある（だから註(120)の一方の〈ある動物精気〉は、かかる「能動的」感覚と異なる〈身体感覚〉でなければならないし、そのことはすでに指摘した通りなのである）。デカルトは註(120)にあって明確に〈ある動物精気〉と〈ほかの動物精気〉とに区別したからこそ、〈身体感覚〉だけでなく、「もう一つの「能動的」感覚」のことを問い得たのはむろんのこと、むしろ『情念論』に記されるは註(120)であるがゆえに、その〈passion（情念）〉にかかわろう「もう一つの「能動的」感覚（ほかの動物精気）」の方が、〈脳の凹みに入った後の〈身体感覚（ある動物精気）〉の動向を述べるよりも先きに質されねばならぬ問題として浮かび上がらせていたのである。この「能動的」感覚の持ち出さずば、彼はそれなしに「表出」しない〈passion〉を語るができなくなるし、いわんや彼が『情念論』をものする動機や根拠を奈辺にみたかを探り当て得ないであろう。筆者はだから、註(120)と註(121)が偶然に類似するとみる以外、彼は前者の註の〈ほかの動物精気（もう一つの能動的感覚）〉が『情念論』用に打ち出されるべく、後者の註の主節の主語となる手直しを加えるほかなかつと察知する。

だが〈passion（情念）〉の形成のために、なぜに「もう一つの「能動的」感覚」が欠かせないのかである。すでに一見した通り、この「能動的」感覚は〈脳の凹み〉の方にゆくのではなく、何より〈脳本体〉の〈神経に導〉かれ、これに〈理性的精神（脳の中枢部位）〉の諸能力の一が働きかけては、〈脳の中枢部位〉中の〈脳本体〉で〈passions（諸情念）〉の一を表出するためにあるのである（次回にその適当な例の引用文を取り上げ検討する予定である）。この「能動的」感覚なしに、〈脳の凹み〉と〈脳本体〉とを含んでいう〈脳の中枢部位〉なる〈理性的精神〉はいったいどのように役立られるのか、かつ再度いうが、認識論的立場での指摘にすぎずとも、『情念論』がどうして日の目をみることができたのか、またデカルトがこの「能動的」感覚をして註(120)に記す〈脳本体〉に向かわしめると捉えられずば、この「能動的」感覚は〈脳本体〉以外のいかなる部位にゆくのか（註(120)では、「能動的」感覚が〈動脈〉を通して直接〈脳の凹み〉にゆくことはない。そこには〈tous les sens（身体感覚）〉がゆくと断じたから「いかなる部位」とは〈脳の凹み〉さえ除かれる部位である）、

さらにその際、〈理性的精神〉はいずこかの部位にあって、そこで〈理性的精神〉の諸能力とこの「能動的」感覚とで〈諸情念〉を表出するとでもいおうとするのか定かになし得ないであろう。別言すると彼がこの「能動的」感覚を認めていたからして、これを註(120)の〈ほかの動物精気〉と見立て、〈ほかの動物精気〉は〈理性的精神〉である〈脳本体〉に「他の動脈」を通して直接入るとし、〈ほかの動物精気〉を〈身体感覚〉と受け取りはしないであろう、また註(120)では註(121)のような〈この動物精気(身体感覚)〉が語られるだけではなくなるであろうということである。

だから今度は、すでに結語していた、註(121)の〈この動物精気〉たる〈*tous les sens* (身体感覚)〉のことが証明されてこなければならない。要は筆者は、デカルトがその〈身体感覚〉を容認したのかを、また註(120)の〈ある動物精気(身体感覚)〉とあわせ、二種類の〈身体感覚〉を認めたのかを明かしておく必要がある。二種類の一は、〈身体感覚〉が〈脳の凹み〉の〈動脈〉に流れ込み、次いでその〈神経〉に伝わり、「循環」せずに〈脳(の凹み)から出る〉ことに、もう一つは、〈身体感覚〉が〈脳の凹み〉の〈動脈〉に流れてから、さらに〈脳本体〉の「他の動脈」へとたどらねばならず、しかもこの〈脳本体〉の〈神経〉になおも伝わって、そこからさらに〈脳の凹み〉の〈神経〉に伝達される「循環(往復)」を経て、〈脳(の凹み)から出る〉ことにあった。もとより、前者は註(120)の、後者は註(121)の各〈身体感覚〉を示唆させてくるし、両者でいう各〈動脈〉(または「他の動脈」)と各〈神経〉はともに、「遠心的」になると捉えられていた。「遠心的」とは繰返すが、その各〈動脈〉(または「他の動脈」)であれ、その各〈神経〉であれ、身体から〈脳に入る〉のでなしに、〈脳から出〉て身体へと向かうおのおのをさすことでしかなかった。

それがゆえに、とりわけ「循環(往復)」するとみた、註(121)の〈身体感覚〉にあって、この〈脳本体〉から〈脳の凹み〉における各〈神経〉間の伝わり方は確かに「遠心的」であると断じてかまわないが、しかしこの〈脳の凹み〉の〈動脈〉から〈脳本体〉の「他の動脈」への流れ方は、いかに〈身体感覚〉が「遠心的」な〈血液〉の流れに含まれているといえども、註(121)にその流れの順として記される〈脳の凹み〉から〈脳本体〉での間では、まるで逆流する流れではないかとの疑問が提起される。〈身体感覚〉が「逆流する流れ」に従うといえるのは、〈脳の凹み〉の〈動脈〉と〈脳本体〉の「他の動脈」がつなが

るからである。だがそうであっても、そのつながりが後者の「他の動脈」から前者の〈動脈〉へのかかわりで、〈身体感覚〉を流すならいざ知らず、また前者の〈動脈〉や後者の「他の動脈」がつながらずに、それぞれ個別に、〈身体感覚〉を「遠心的」な〈血液〉中に含ませながら、ときに各〈神経〉に伝達させるか、ときにその〈血液〉のまま身体へと向かわせるかならいざ知らず、デカルトはそれでも、この「逆流する流れ」をさえ「遠心的」であるといわせるのであろうか。そう断じるには無理があろう。それどころか、註(121)での彼のかかる見方は否定されねばならぬのであり、否定されずとも「難点」となるは確かであろう（それに彼が、以上に記した部位を〈脳の凹み〉から〈脳本体〉への順（註(121)は少なからずその順が可能となる）として、あるいはこの逆としてつながると、はてはつながらないとみているかも不明なのである）。

むしろ「彼のかかる見方」と表現したのは、さらに〈血液〉や〈神経〉に対して、「遠心的」と「求心的」ときおり名付け得たのは、またさらに〈脳の中枢部位〉に関連しよう〈動脈〉には〈動脈〉と「他の動脈」があるといったのは筆者であり、デカルトではない。だから、たとえば「彼のかかる見方」を「彼の「逆流する流れ（なる）」見方」と捉え直しおくと、〈脳の凹み〉から〈脳本体〉への〈血液〉の流れを「逆流する流れ」とみなすは、この流れが上記での「遠心的」なそれではなくして、どうしても〈血液〉の「求心的」な流れに符合させずにおれないことになるわけである。しかしここに問う例の〈tous les sens（身体感覚）〉は、すでに「求心的」な〈血液〉の流れのもとにあらう能力でなかったはずである。すなわちこの〈身体感覚〉は、なるほどかの〈腺H〉にかかわる〈小さな動脈〉と出会うところの、〈動脈〉との「分かれ目」まで、「求心的」な〈血液〉として〈動脈〉を流れるが、それでも「分かれ目」以後からは、〈小さな動脈〉に入らずに、依然〈動脈〉だけを通る〈血液〉の流れに従わざるを得ない能力であると、かつ「分かれ目」以後の〈動脈〉の流れを「遠心的」な〈血液〉のそれとなし、その〈血液〉中に〈混ざ〉っていることにある。

そのようにみても、つまり〈腺H〉以降での「遠心的」な〈血液〉（これに〈混ざる×身体感覚〉）の流れが、註(121)で〈脳の凹み〉と〈脳本体〉に順次ゆきわたると読み得ても、なぜ突如〈脳の凹み〉から〈脳本体〉へと向かうところでの「求心的」な流れとして捉えられてしまうのか（「遠心的」「求心的」

なる各語の私的区別はデカルトが〈腺H〉または〈脳の中樞部位〉を精神とみなしたことに起因する。精神はおよそ「能動」であらねばならぬからして、その精神にかかわる〈血液〉の流れもまた、「遠心的（能動）」である必要があるといえるわけだ）、さらに彼がこの「求心的」な〈血液〉の流れを可能にしている、上記した〈動脈〉や「他の動脈」以外の、「求心的」に流れさせるための〈動脈〉を想定して、〈血液〉の「求心的」な流れが認められるとでもいわせるのであろうか、それでは「遠心的」な流れとみた〈動脈〉や「他の動脈」または「想定」したと記した〈動脈〉は、それぞれいかなる役目を担うといい得るか、〈動脈〉と「他の動脈」があたかも一本につながるにあって、〈血液〉の「遠心的」な流れは、最終的に〈血液〉を〈脳（の凹み）から出〉して身体へと流すにあるのだから、本来〈脳本体〉の「他の動脈」より〈脳の凹み〉の〈動脈〉に達していなければならぬであろう、しかるに〈脳の凹み〉の〈動脈〉から〈脳本体〉の「他の動脈」へと逆に流れるとなると、その逆の流れは〈血液〉の「逆流する流れ（求心的な流れ）」でしかあり得なくなろう（だから「逆流する流れ（なる）見方」とはそれ自体筆者の表現にすぎずとも、「遠心的」な流れに逆らう見方になるのを示唆させよう（彼が「想定」したと記した〈動脈〉にあってもこれと同様である）が、しかし彼はまた、〈身体感覚（血液）〉がなぜ〈腺H〉以降、〈脳本体〉ではなく、〈脳の凹み〉（の〈動脈〉）にすぐ入るとしたのか、それは思うに、「もう一つの「能動的」感覚」と区別するためである。この「能動的」感覚が〈脳本体〉に入ったことはすでに触れた通りである）。

しかも註(121)で知るように、デカルトが〈身体感覚〉が〈脳の凹み〉より〈脳本体〉へと流れたあとに、はじめて〈脳本体の... 孔から神経に入る〉といった際、〈身体感覚〉はその度ごとにすべて、〈脳本体〉の〈神経に入る（伝わる）〉とみてかまわぬであろうか、それとも〈神経〉に伝わらない場合があることは予想されないのか（本稿引用文㊟によると、この〈身体感覚〉はすべて〈神経〉にかかわると読み得るが）、たとえば〈身体感覚〉を含んでいよう〈血液〉は〈脳本体〉に達していても、その〈血液〉中の〈身体感覚〉が〈神経〉に伝わらば、このときかかる〈血液〉が〈脳の中樞部位（理性的精神）〉たる一部位のこの〈脳本体〉と身体とを「循環」せずにおれないと語られる以上、〈脳から出る〉にあっては、どこかの部位を経由するのか、あるいはこの〈脳本体〉より即座に身体へと流れ出るのであろうか（筆者はかかる〈血液〉は

それこそ「遠心的」な流れとして、本稿引用文㉔に記される〈神経〉の伝わり方と同様、〈脳から出る〉には〈脳の凹み〉の〈動脈〉を經由せねばならぬと、その際は〈腺H〉内の〈小さな動脈〉が〈腺Hから出〉て〈動脈〉に戻るがごときにつながるように、〈脳本体〉の「他の動脈」は〈脳の凹み〉の〈動脈〉に接続すると予測する。この二つの動脈がつながる予測に立ち得るために、かかる〈血液〉中の〈身体感覚〉は註(121)における〈血液〉の流れに従うことがないといわねばならなくなるのである。

ところが上記した、〈脳本体〉において〈神経〉に伝わらない〈身体感覚〉がこの〈脳本体〉の「他の動脈」から〈脳の凹み〉の〈動脈〉へと流れる流れ方は、実は〈脳本体〉で〈神経に入〉ら（伝わら）ないからして、〈理性的精神〉の諸能力の働きかけを受けることのない「もう一つの「能動的」感覚」の流れと同じになってしまうのである（この「能動的」感覚が〈脳本体〉の〈神経に入〉り、〈理性的精神〉の諸能力の働きかけに出会うと、〈情念〉などの、精神の新たな諸能力が表出したこともすでに触れた通りである）。すると〈身体感覚〉もまた、この「能動的」感覚と同じ、〈脳本体〉の「他の動脈」と〈脳の凹み〉の〈動脈〉を「遠心的」に通過するとみてよいのであろうか。〈身体感覚〉とこの「能動的」感覚とは別別の能力である（〈脳の中枢部位〉を目の前にして、〈腺H〉を経過したのち、前者は〈動脈〉に戻るその〈動脈〉だけを通り、後者は〈動脈〉に戻り、かつ「他の動脈」に入った各能力である）から、〈身体感覚〉は「遠心的」な流れに従うと指摘できても、この「能動的」感覚の通るかの「他の動脈」とかの〈動脈〉を共有することが不可能なのである。そこで筆者は先きに、註(121)の、〈脳本体〉にゆきつく〈身体感覚〉に対して、「求心的」に流れる〈動脈〉を想定してみると記したが、ここでもそれと同様に、〈身体感覚〉が「遠心的」に流れて、しかもこの「能動的」感覚と共有しない新たな別の〈動脈〉をば想定するだけで済ませられるのであろうか（こうした〈動脈〉を新たに提起し得るは、こうした〈動脈〉も〈脳〉内に、本稿引用文㉔に語られる〈神経〉が無数にあると捉えられるように、無数にあるうちのそれぞれであるといえるからである）。

他方、〈身体感覚〉が〈脳本体〉の〈神経に入る（伝わる）〉と想定し得るかどうかである。筆者にすると、のちに記す理由から、このことも含めて、実は想定しなくてよかったと答えられる。それでもこの場合、なぜそういえるか

である。それはすでに、〈脳本体〉の〈神経に入る〉能力があったからである。その能力は「もう一つの「能動的」感覚」である。この能力とは、これが〈腺H〉以降、〈動脈〉と「他の動脈」を「遠心的」に流れて、〈脳本体〉にたどりつく以前に、繰返すが、もともと身体的能力にすぎない〈身体感覚〉があつた〈腺H〉内で〈理性的精神〉の〈感じる〉という能力の働きかけを受け、〈腺Hの表面〉に表出することで語られてこよう「能動的」感覚（能動的 sentiment）の、しかしそこで表出せずして、〈腺H〉内の〈細糸〉や〈小さな動脈〉を通り、その〈腺Hから出〉て〈動脈〉に戻る同種の能力なのである（この〈動脈〉が「〈動脈〉と「他の動脈」」と上記したうちの〈動脈〉であるから、〈脳本体〉の方にゆくとみる「能動的」感覚にとっては、この〈動脈〉と「他の動脈」を通過せねばならぬことになる一方、〈脳の凹み〉にゆくとみるは「能動的」感覚ではなく、したがって「他の動脈」に分岐することなく、この〈動脈〉だけを流れる〈身体感覚〉となる。そこで前段までのいくつかにて、〈身体感覚〉がその〈脳の凹み〉から〈脳本体〉に流れ通るのかに検討を加えた次第であったのである）。同種であると捉えたがゆえに、この能力は「能動的」感覚のもう一つに充当せずにはない。かつこの「もう一つの「能動的」感覚」には、これも前段までに触れたような、〈脳本体〉の〈神経〉に伝わらない場合と、今みようとするとかかる〈神経〉に伝わる場合とがあるといえたわけである。

「もう一つの「能動的」感覚」が〈脳本体〉の〈神経に入る〉となると、これも繰返しいうが、この「能動的」感覚に、〈神経を介して×理性的精神〉のたとえば〈意志する〉能力が働きかけて、〈理性的精神〉は〈情念〉を表出するのである。〈情念〉がまた〈脳から出〉て、身体に伝わるときには、その〈脳本体〉の〈神経〉から、〈脳から出る〉という〈脳〉の〈脳の凹み〉の〈神経〉へと伝達される必要がある。だが例の〈身体感覚〉が註(121)の〈脳本体〉の〈神経に入〉って、上記した「もう一つの「能動的」感覚」と同じ過程を「遠心的」にたどると、さらにかかる過程に対して、〈身体感覚〉が〈脳本体〉に達するまで、〈脳の凹み〉の〈動脈〉より〈脳本体〉の「他の動脈」へと「求心的」に流れてはつながることをさしていう「循環（往復）」に、つまり「求心的」な流れ方や「遠心的」な伝わり方を可能にする「循環（往復）」に従うと、さらにまた〈身体感覚〉が〈脳本体〉の〈神経〉に伝わらないで、〈脳（の凹み）から出〉て身体へ流れるに、「新たな別の動脈」を用意せねばならぬと想定

することは、デカルトの語らんとする認識論にあってもはや不必要ではないのか。なんとすれば、同じ感覚を記すと察知される註(120)の〈ある動物精気(身体感覚)〉と同様に、上記した〈身体感覚〉もかの〈腺H〉を経由してもしなくとも、〈脳本体〉の「他の動脈」やその〈神経〉に閏知しないし、そのうえ〈理性的精神〉の諸能力がこの〈身体感覚〉には働きかけない(だから〈身体感覚〉は〈情念〉になることはない)ので、たえず〈脳の凹み〉の方へ向かう〈動脈〉のみを〈身体感覚〉のままに流れる以外になくなるからである。そしてもとより〈身体感覚〉と、〈脳本体〉の〈神経に入〉らない「もう一つの「能動的」感覚」とは同時に、前者が〈動脈〉を、後者が「他の動脈」から〈動脈〉へ流れるのではないと知っておくべきである。

さらなる理由として、筆者は上記での〈身体感覚〉にしろ、〈腺Hの表面〉で表出した「能動的」感覚にしろ、また〈脳の中樞部位(脳本体)〉でその〈神経に入る〉か入らないかの各「もう一つの「能動的」感覚」のことにしろ、デカルトは、このいずれかが〈神経に入〉らざば「他の動脈」にかはともかく、〈動脈〉とともにあるというはむろんのこと、これを含めたおのおのを各能力の唯一の代表例になし得たとみる。各能力がそれとして成る例をそれぞれを一とするのでなしに、たとえば註(120)や註(121)が各物語るかのように、つまりこれらの註が一たるを表わす〈身体感覚〉にすぎぬに対して、二つの例を暗示させたり、それで相異なる〈身体感覚〉を意味させたりするその多様さ、あるいは複雑さにおいて読まれるとなると、彼のいう認識論を語ることはおよそ不可能になってしまうのである。感覚というものがこれまで述べた以上の多岐にわたるならば、筆者は身体や精神の各感覚能力を見分けていい当てるにあって、いったい何を基本に据えるかさえ見通し得ないであろう。だから彼はそれを回避すべく、註(121)の内容を註(120)にあらためもしたと推察する。彼のいう認識論では、各能力は、その各例が「時間的経過」を有してその都度示されるわけでもなく、一度提示されると指摘するだけでこと足りるのである。

それゆえ註(121)の内容を考慮しない立場に立って、当然一方の註(120)の〈ある動物精気〉が〈tous les sens(身体感覚)〉に置き換えられねばならぬばかりか、〈ほかの動物精気〉はもはやこの〈身体感覚〉に換言できなくなるために、かの「もう一つの「能動的」感覚」に見立てられるしかない。もしこの「能動的」感覚が〈ほかの動物精気〉に充当させられずば、デカルトはどうして

〈脳本体〉の〈神経に導く〉この「能動的」感覚のことを用意し、そのための〈ほかの動物精気〉と書き記したのであろうか、あるいは筆者が理解せんとする、〈腺Hから出〉て〈動脈〉に戻り、さらに「他の動脈」を経由し、〈脳本体〉にとどくこの「能動的」感覚は、それがあると確かめられるとはいえども、なぜに〈脳の凹み〉に達するとされるのか（しからば〈身体感覚〉が〈脳本体〉に達するのか）、それとも〈脳の凹み〉と〈脳本体〉を含んでいう〈脳の中樞部位（理性的精神）〉以外にとどくのか、またそのどこかの「部位」にて、〈理性的精神〉で語られた諸能力が働きかけて、たとえば〈情念〉を表出するようにかわるのか、すると〈理性的精神〉があるべき上記二つの「部位」の指摘は何んであるのかということになる。だが「もし」以下に掲げたことは現実的ではないのである。

註(120)において、〈身体感覚〉がこの引用の後半部分にではなく、前半部分だけに関連してこそ、換言すると〈身体感覚〉が〈脳本体〉の方に向かわずに、〈脳の凹み〉に入り、それと関係するだけにとどまってこそ、〈身体感覚〉にとって、〈脳本体〉の〈神経〉に入り、〈理性的精神〉の諸能力の働きかけを受けたりする必要がなくなるわけである（「他の動脈」を通過し〈脳本体〉にゆくのは「もう一つの「能動的」感覚」であった）。また〈腺H〉以降、この「能動的」感覚と〈身体感覚〉が同時には流れないとみるは、前者の能力が〈動脈〉と「他の動脈」を通過して〈脳本体〉に、後者の能力が〈動脈〉のみを通過して〈脳の凹み〉にとどくにせよ、各径路に同時に流れるのをさしはしないどころか、かえってある異なる「時間」ごとに、前者が〈細かな粒子〉としての「能動的」感覚であるがゆえに「他の動脈」へ、後者が〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉としての〈身体感覚〉であるがゆえに〈動脈〉へ、それぞれ「遠心的」に流れゆくのを示唆させるからにはかならない。しかしここで、前者の「能動的」感覚が「他の動脈」の立ち寄る〈脳本体〉にあって、さらにその〈神経〉に入らないとした場合について繰返しおくと、確かにこの「能動的」感覚は〈脳本体〉内の「他の動脈」から〈脳の凹み〉の〈動脈〉へと「遠心的」に流れようが、それでもこの流れが〈脳の凹み〉の〈動脈〉で〈身体感覚〉の流れと同時（いっしょ）にならないのは、相異なる「時間」を「遠心的」に流れるからして、〈ほかの動物精気〉と〈ある動物精気〉たるこの各〈血液〉は〈混ざり〉はしないということになる（以上の理由も加味させると、〈身体感覚〉

覚)の方は〈脳の凹み〉の「部位」にて、〈脳本体〉からくる「他の動脈」と一本につながっていようと、〈動脈〉だけを流れることに何ら支障は生じなくなる)。)

それで〈脳本体〉の〈神経に入)らない「もう一つの「能動的」感覚」に関して知り得ることは何か。何より、〈脳本体〉からの「遠心的」な流れを可能にする「他の動脈」は、〈脳の凹み〉に接する〈動脈〉と一本につながるという前段のことが肯定されていなければならない。そう捉えておかねば、この「能動的」感覚は、〈脳(の凹み)から出る)ことが、とどのつまり身体へと流れることが不可能になる。それはたとえば、本稿引用文⑨に〈感覚のすべてが神経に依存しているし、神経はすべて脳から出る)と記されるこの〈感覚)と〈神経)の関係を〈感覚(「能動的」感覚)と〈動脈)の関係に波及させることが許されとなると、その〈脳)には「無数)の〈神経)が接続し、〈神経はすべて脳から出る(身体と関連する))以上、〈脳から出る)という〈脳)とは、〈出る)ときもかの註(120)でいう〈ある動物精氣)が〈動脈)を通し〈脳の凹みに入る)ときと同じく、〈神経)でも〈脳の凹み)になっていなければならぬことが、そこで〈脳本体)の〈神経に入)った「もう一つの「能動的」感覚)もこの〈神経)から〈脳の凹み)の〈神経)につながるし、さらに身体の〈神経)に「遠心的)に伝えられることが確認されるといえる。だから〈脳本体)の〈神経に入)らない「もう一つの「能動的」感覚)さえ、〈脳から出る)には、〈脳本体)の「他の動脈)から〈動脈)へとつながらずにおれない、〈脳から出る)×脳)である〈脳の凹み)に流れゆかずば、身体にかかわりあえなくなるのである(ちなみに註(120)の〈ある動物精氣)は上記引用文⑨の〈tous les sens(身体)の感覚)になることに、また〈神経)や〈動脈)でも、〈脳の凹み)を通過することについては後述してある)。少なくとも〈脳本体)の〈神経に入)らないこの「能動的」感覚はその「他の動脈)だけを流れて身体に出る)のでも、そのうえ〈脳の中樞部位)たる〈脳の凹み)と〈脳本体)間をそれぞれ〈動脈)や「他の動脈)と各〈神経)にわたって「循環(往復)」することもなくなる。なんとすれば、この「能動的」感覚は〈腺H)以降の流れにあって、〈脳の凹み)に向かう〈動脈)ではなしに、〈脳本体)に向かう「他の動脈)にこそ関与し得たからである。

それでは〈身体)の感覚)についてはどうか。〈身体)の感覚)は〈腺H)以降、

〈脳の凹み〉に向かう〈動脈〉だけを「遠心的」に流れて、註(120)に語られるように、〈脳の凹みに入〉った。しかしこれがそこに〈入る〉までに、「他の動脈」に流れゆかないのは、あるいは一方の「もう一つの「能動的」感覚」という、〈脳本体〉の「他の動脈」から〈動脈〉への流れを遮るのはなぜか。これは思うに、「他の動脈」が〈動脈〉に接続する各つなぎ目の〈動脈〉の内側の〈腺H〉に近い方に、その〈血液〉の「遠心的」な流れに添うように付着する〈小さな戸すなわち弁 (ces petites portes, ou valvules)〉<sup>(122)</sup>があるためであり、かかる〈弁〉が上記のおのおののときにあって閉じてしまうからである（〈弁〉も複数形であるのは、〈弁〉が筆者のいう「各」なる二箇所にわたるからにほかならない）。さらになぜ〈弁〉が閉じるかは思うに、普段開いていると察知し得る〈弁〉が前記した、〈身体感覚〉を含んだ〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉たる両方の量によって、閉じるからである。〈細かな粒子〉だけでも、また〈粗い粒子〉だけでも各量であるといえる（各量のときは〈弁〉は開いていよう）が、しかし〈弁〉を閉じる際は、各量の〈血液〉のそれぞれに含まれた〈身体感覚〉はいっしょに流れるわけである。

とまれ〈身体感覚〉は〈動脈〉を通して〈脳の凹みに入る〉し、それ以降については、ここでも〈身体感覚〉が〈脳の凹み〉の〈神経に入る〉か入らないかの各場合のあることが予測されねばならない。先きに〈神経に入〉らないときをみておくと、これは〈身体感覚〉が〈脳から出る〉ことであり、〈脳から出る〉にあつては〈脳の凹み〉内の〈動脈〉から身体（の動脈）を通るように流れるしかない。そして〈身体感覚〉が〈神経に入る〉ときを語ろうとするやいなや、真先きにまだ質さずにいた問題が浮上してくる。これにはまさに「もう一つの「能動的」感覚」の一も該当しているのだから、それを含ませて問えば、なぜ〈身体感覚〉が〈脳の凹み〉の、またこの「能動的」感覚が〈脳本体〉の各〈神経に入る〉ことができるのかということである。それはおよそ、〈身体感覚〉が、またこの「能動的」感覚が各「部位」の〈神経〉に強い「刺激」となって影響するからにほかならない（弱い「刺激」は〈神経に入る〉ことが不可能となる）。

だから当の、〈脳の凹み〉の〈神経に入る〉〈身体感覚〉についていえることは、〈身体感覚〉が〈脳の凹み〉の「遠心的」な〈神経〉を伝わって、〈脳（の凹み）から出〉て身体（の神経）に達することにある。これは繰返してでも

いわねばならぬが、〈身体の感覚〉が〈脳本体〉の「他の動脈」に向かったり、かつその〈神経に入〉ったりすることではない（それゆえ〈身体の感覚〉にとっては註(121)の内容（わけても後半部分のそれ）は否定される必要があると断じたわけである）。さらに〈脳の凹み〉の〈神経〉に関しては次なる注意が肝要である。筆者は本稿引用文㊸を参照しては、〈脳〉にあたかも「無数」の〈神経〉があると認め得たが、その「無数」の一がここでいう〈神経〉に充当せざるを得ないと、別言するとこの一〈神経〉は、かの〈情念〉が身体にさえも伝わらんとするとき、〈脳本体〉の〈神経〉から〈脳の凹み〉の〈神経〉へとたどる各〈神経〉とは別の〈神経〉になると捉えておくのである。ところがデカルトは註(120)で〈ある動物精気が脳の凹みに入る〉と記すだけで、註(121)の後半部分に語られるような〈神経に入る〉という〈神経〉については表面上一言も触れることがない。それでも彼は註(121)の後半部分で〈(脳本体)の孔から神経に入る〉というのだから、同じ〈脳〉の一「部位」である〈脳の凹み〉にも、〈ある動物精気〉の〈入る〉〈神経〉があつてよい。だが彼は註(120)の〈脳の凹み〉において、註(121)の後半部分で示すごとき〈神経〉を想定しつつも、当然と察知したからして、省いてしまったのではないか（何せ註(120)の〈ほかの動物精気は... 神経に導〉かれると語る以上、〈ある動物精気〉も同様でなければならぬはずである）。そうみないことには、上記引用文㊸での〈tous les sens〉と〈神経〉がまったく関連しなくなろう。彼が註(120)の〈ある動物精気〉に〈tous les sens（身体の感覚）〉を相当させ、㊸でその〈感覚のすべてが神経に依存している〉と述べるかぎり、〈身体の感覚〉を〈神経〉に関係させてはじめて、身体の〈感覚のすべて〉がいい表わされるからである。そうでないと、〈身体感覚〉と〈神経〉の関連は「不明瞭」のままであるし、〈身体感覚（ある動物精気）〉が〈脳の凹みに入る〉という註(120)の前半部分だけにかかわらずに、およそ〈身体感覚〉の特色が打ち出し得ないわけである。

しかしながら筆者にとって気になるのは、上記引用文㊸中の〈tous les sens〉の〈tous〉のことなのである。なんとなれば、〈tous〉を〈sens〉に修飾させる〈すべての〉は、三つの「能動的」感覚をも含むか、それともこの三つ以外を、つまり〈身体感覚〉だけをさすか、しかも〈身体感覚〉がその生じる度のあらゆる「時間」を考慮に含め語られるのかが不明であるからである。だが少なくとも、〈身体感覚〉は身体の〈sens〉であるかぎり、三つの「能動的」感覚

のような精神や身体の（諸）能力であることはない。あるいは〈身体の感覚〉は、二つの各「能動的」感覚が必ずや〈神経〉に関係する（一はまだ途中の検討でしかない、〈腺Hの表面〉に表出する「能動的」感覚、一は〈情念〉を表出する際の「もう一つの「能動的」感覚」となる。また前者は〈腺H〉という精神）にて、後者は〈脳の中樞部位〉という〈理性的精神〉にて表出しよう各能力である）のに比べ、その〈身体の感覚〉すべてをして〈神経〉に関与たらしめるわけにいかない。これには前記もした通り、弱い「刺激」がゆえに、〈神経〉に入らない〈身体の感覚〉が充当するとみた（この〈身体の感覚〉の場合と同様なのがまた、「もう一つの「能動的」感覚」といわれる一能力の場合であった）。要するに〈神経〉に関与しない〈身体の感覚〉はまったく（理性的）精神（わけても脳本体）とかかわらない能力であり、〈神経〉に関与しても、その（理性的）精神の諸能力の働きかけを受けない能力であるといえる。そこで身体の〈感覚のすべての〉とは、この〈神経〉に関与するしない両方のみを含意した能力でしかないし、一度現実になるだけでよいこれらの場合をさし示す〈すべての〉であると答えるほかなくなるのである。

それでも上記の〈感覚〉はなぜ身体の能力とみられるのか、別言すると註(120)の〈ある動物精気〉がなぜ本稿引用文㊟の〈tous les sens（身体の感覚）〉に置換し得たかである。〈動物精気〉は〈血液〉のことであるばかりか、〈血液〉に〈混ざ〉ったり、〈神経〉に入ったりする、たとえば能力をもさした。デカルトのいう認識論はこの能力を取り上げ、能力がいかに理解されるかを語ることで成り立っていた。さすればこの〈日常的用法〉における認識論にあって、その能力は彼が〈心身合一〉をめざすというからして、何よりもまず身体の能力でなければならなかったし、そのうえ身体の能力は身体には前記していた〈sens（感覚）〉や〈imagination（想像）〉しかなかったのである。そうした指摘にないかぎり、つまり註(120)の〈ある動物精気〉の例に上記引用文㊟の〈sens〉を引くは間違いではないことを、また〈ある動物精気〉の例を身体の〈imagination（想像）〉にも見立てることによって、身体の〈感覚〉や〈想像〉が各〈ある動物精気〉と捉えられることを抜きにして、〈ある動物精気〉はいったい何に置き換えられ得るであろうか。この身体の二つの能力以外の、たとえば本稿引用文㊟の〈葡萄酒の蒸気〉を主にして〈ある動物精気〉に当てはめんとするのは、彼のいう認識論にならぬは確かなのである。

(ここでその〈想像〉に関し簡単にまとめおく(詳細は今後譲る)と、およそ以下のことになろう。註(120)の〈ある動物精気〉としての〈身体の想像〉は〈身体感覚〉と同様に、〈腺H〉の〈小さな動脈〉にはゆかずに、〈動脈〉を通ったまま〈脳の凹み〉に達して、その〈神経に入る〉か入らないかするであろう。一方〈腺H〉にとどいた〈身体の想像〉は〈理性的精神〉からの〈imager(想像する)〉という能力の働きかけを受けることになろう。その〈腺H〉で産出された能力は筆者のいう「たんなる想像」である。これがまたそれとして〈腺Hの表面〉で表出した。だがそこで表出せずに、〈腺Hから出〉て〈動脈〉に戻り、さらに〈脳本体〉に接続する「他の動脈」に向かうところの「たんなる想像」があった。筆者はこれを「もう一つの「能動的」感覚」と断じたのと同じく、「もう一つの(たんなる)想像」ということにする。「もう一つの想像」もまた〈脳本体〉の〈神経に入る〉か入らないかするであろう。〈神経に入る〉場合、「もう一つの想像」は、たとえば〈理性的精神〉の〈悟性〉から手助けされての「〈悟性〉を手助けする想像」を、あるいは他の能力の働きかけを受けての「〈情念〉になる想像」をこの〈理性的精神(脳の中枢部位)〉で表出するであろう。これらはもとより、註(120)でいう〈ほかの動物精気〉に充当せざしおれない二能力となるであろう。〈神経に入〉らない場合、「もう一つの想像」は当然、〈脳本体〉の「他の動脈」から〈脳の凹み〉の〈動脈〉へと流れ、身体(の動脈)に出るであろう。

上記のことはともかく、最後に繰返せざるを得ないのは、〈sens(感覚)〉には〈理性的精神〉の諸能力の働きかけがないために、その〈感覚〉は、「能動的」感覚ないしは「もう一つの「能動的」感覚」になれない、身体能力のままに、〈脳の凹みに入る〉〈動脈〉にしか向かわなくなると、また〈脳の凹み〉内の身体〈感覚〉を伝える〈神経〉は、たとえ「遠心的」な〈神経〉では同じでも、もはや先きに記した、「もう一つの「能動的」感覚」の一が〈脳本体〉の〈神経〉から〈脳の凹み〉へとつながるその〈脳の凹み〉の〈神経〉とは「別の神経」でなければならない。何しろデカルトは本稿引用文②で〈脳〉の内外にあって、〈細糸や細管〉を含めた「無数」の〈神経〉があり、接続し合うと語るのだから、身体〈感覚〉は、対〈動脈〉(〈神経〉に入らないで〈筋肉〉などに流れる)でなしに、〈神経〉に入るは、身体〈感覚〉をして「もう一つの「能動的」感覚」とは「別の神経」に伝わしめるとの見通しが可能となるほ

か、身体の〈感覚〉はこの「別の神経」を通るだけで、「循環」はせずに、直接〈脳（の凹み）から出〉て〈筋肉〉などに伝わると認めてよい。

なお、上記した註(120)と註(121)中の各〈孔 (pores)〉については、既出引用文<sup>(120)</sup>での〈孔 (trous)〉とともに<sup>(124)</sup>、なおまた、デカルトは〈細かな粒子〉や〈粗い粒子〉に対して、これ以上のことを語らぬが、たとえばその各中味が何になるかは、次号にて分析する予定である。

〔続〕

註

今回の参考文献は以下の通りであり、各註はその文献に付した記号A-C.に従う。

A. René DESCARTES(ŒUVRES LETTRES)Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard.

- ① 〈TRAITÉ DE L'HOMME〉
- ② 〈DISCOURS DE LA MÉTHODE〉
- ③ 〈MÉDITATIONS〉
- ④ 〈OBJECTIONS ET RÉPONSES〉
- ⑤ 〈LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE〉
- ⑥ 〈LES PASSIONS DE L'ÂME〉

B. A. Domart et J. Bourneuf 〈Nouveau LAROUSSE MÉDICAL〉(医学大事典、朝倉書店)

C. 新潟大学人文学部人文科学研究

- ① 『なぜ感受性なのか』(3), 第94輯, 1997年。
- ② 『デカルトにおける理性と感覚』(2), 第98輯, 1998年。
- ③ 同上(4), 第101輯, 1999年。
- ④ 同上(5), 第103輯, 2000年。
- ⑤ 『シモーヌ・ヴェーユとデカルト』〔I〕, 第104輯, 2000年。
- ⑥ 同上〔II〕, 第106輯, 2001年。
- ⑦ 同上〔III〕, 第107輯, 2001年。
- ⑧ 同上〔IV〕, 第108輯, 2002年。

なお、以下の註の番号が(63)からはじまるのは、本稿が前号「シモーン・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕～デカルトの〈âme〉の諸能力について(その1)～」の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

(63) A.④P.811参照。

(64) A.④P.825参照。

(65) A.④P.825参照。

(66) 《DORLAND'S ILLUSTRATED Medical Dictionary》(ドーランド医学大辞典編集委員会、廣川書店、P.708)によると、〈fil (l) et〉とは「絨帯、神経系における、神経線維の長い帯」と記されるし、よく〈filet nerveux (神経線維)〉として用いられるようだ。しからば〈細糸(線維)〉は神経に与すといえども、神経(nerf)そのものとどこが違うとみるべきか。上記の註(65)や『医学大辞典』(P.1227)が明かすように、神経は〈細糸(線維)〉を〈神経髄(中心)〉に据え、しかも神経ではその〈細糸(線維)〉が集まって束となることをもって、一本の神経と、本文に記した通りの単数(一本)の〈細糸〉との区別ができるわけである。『医学大辞典』にはさらに、「神経は神経線維の束を包みこんだ結合組織性の鞘(神経上膜)からなっている。各神経線維束は結合組織性の固有の鞘(神経周膜)で包まれており、その内側面は扁平化した中皮性細胞で形成されている。… 各神経線維は細胞性の鞘(神経鞘)により包まれている」(傍点・傍線部分は筆者)と書かれるが、それでもこの引用はあまりに専門的であるので、ここではその解説は割愛するほかない。ただし傍線部分からは、一本の〈細糸(神経線維)〉は前記した「神経に与す」とみることを確実にする。

(67) かなり以前の拙論『感受性試論』(Ⅴ)(新潟大学教養部研究紀要、第21集、1990年、註(51)P.26やP.P.33-44参照)で語ったことは、本文引用文⑳の〈細糸が結合したり、からまったりする〉ことをして、本文引用文㉑の〈細糸の(結合する、あるいはからまるといふ)運動がその普段以上や以下の原因により、細糸にあって増加したり、減少したりする〉と記されることに該当せしめずにおかないと筆者には察知される。拙論では「閾値」について触れておいた。だから現代生理学でいう「閾値」の思想が、デカルトの記す上記引用文㉑に当てはまってくるということになる。だがこれをどうみることができるのかである。そこで拙論に述べたことを再度持ち出してから、その見方の検証に取りかかることにしよう。筆者は、1903年オーストラリア生まれで、1963年ノーベル医学生理学賞を受賞したJ.C.「エックルズらの研究によって中枢神経におけるシナプス

(ニューロン (神経細胞) とニューロンの継ぎ目, またはこれらの神経細胞接合部をさす) にインパルス (電氣的波 (神経衝撃) または興奮のこと) を送り込む, (最初に記した) ニューロンには, 2つの型すなわち興奮性ニューロン (excitatory neuron) と抑制性ニューロン (inhibitory neuron) の存在することが明らかになり, それによって, 興奮性シナプス (excitatory synapse) や抑制性シナプス (inhibitory synapse) の区別がなされることになった」と記しおいた。以上を踏まえて, 筆者はその最初の「ニューロン」をば (細糸 (のニューロン)) に, もう一つの「ニューロン」をば (細糸) が (神経の髄) に「束」となっている (神経 (のニューロン)) に, また「シナプス (両ニューロンの継ぎ目あるいは接合部)」をば (細糸 (のニューロン) の根) になると見立て得る。そこでさらに上記内容を本文中で記したことに, つまり「(腺H) 内でたわみを有し, 浮動する」一本の (細糸) が他の (細糸) と (結合したり, からまったりする) というに当てはめてみると, (結合する) ことが「興奮性ニューロン」あるいは「興奮性シナプス」を, (からまる) ことが「抑制性ニューロン」あるいは「抑制性シナプス」をかたちづくる (原因) となり (したがって引用文②にて, (細糸の運動がその普段以上や以下の原因) と訳したことが証明された), おのおのをしてもう一つの「ニューロン」を有する (神経) に伝達性の「興奮」や「抑制」を生じさせるわけである。そのときデカルトのいう (細糸の) 根) に相当すると指摘せずにおれない「シナプス」にとっては, もう一つの「ニューロン」に伝わらせよう, 「インパルス (ここでは「興奮」や「抑制」としての各興奮が含意される)」を起こす「刺激の強さ」をさす「閾値」を超えることになる。そしてこの「閾値」を超えることはデカルトの既出引用文③の表現では, (腺Hの表面に描かれる) ことを意味すると捉えられる。なんとなれば, ((細糸の) 根) に (細糸が結合 (する)) とみることは, (結合) が一本の (細糸) のみでなく, 何本かの (細糸) を集めることで, 一本の場合より大きく (揺さぶられる) こと, 要するに (結合) によって, (細糸) 自身が (細糸において増加する) こと, これは同時にまた, 生理学でいう「インパルス (興奮) としての興奮」が (細糸において増加する) ことを示唆させるからして, (根) が「興奮性シナプス」になろうとし, 他方で ((細糸の) 根) に (細糸がからまる) とみることは, 何本かの (細糸) が (からま) っては, (からまる) だけに小さく (揺さぶられる) こと, 要するにこの「からまり」によって, (細糸) 自身が (結合) の際よりも (細糸において減少する) こと, これは同時にまた, 生理学でいう「インパルス (抑制) としての興奮」が

〈細糸において減少する〉ことを示唆させるからして、〈根〉が〈抑制性シナプス〉になろうからであり、この各「刺激の強さや弱さ（閾値）」の役割を担う〈根（シナプス）〉から、「興奮（増加）」や「抑制（減少）」のおのおのがそのまま〈神経〉に、デカルトのいうところでは、〈増加は熱の感覚（sentiment）を、減少は冷たさの感覚（sentiment）をそれぞれ精神（âme）に抱かせるであろう〉にあって、〈神経〉をちりばめる、〈腺の表面に描かれる〉ように伝達させられ得るからである。とまれ現代生理学においてさえ共通していようデカルトの主張は当時としても卓見である。したがって〈細糸〉という語が思弁哲学的語（思惟）によりもたらされるのでないことが明白にされるが、本文の「たんなる想像」は「抑制」かは後記註(108)の内容とあわせ次回結語する。

(68) A.⊙ART10.P.P.699-700参照。

(69) C.⊕P.18引用文⑥参照。

(70) 本稿引用文②参照。

(71) C.⊕P.18引用文⑥参照。

(72) C.⊕P.18引用文⑥参照。

(73) C.⊕P.42註欄註(56)中の最後の段落参照。ここにも、また本稿本文にも記されるように、血液（動物精気）が脳（内）に最初に流れる部位は〈脳の凹み〉であることが諒解されてくる。だから本稿引用文②の直前段落（「そこで」からの段落）中に記した「脳の入口前後」の脳とは、〈脳の凹み〉となり、またその〈入口前後〉のことでありと理解できる。

(74) C.⊖P.59引用文④⑤に〈l'entrée de ses concavites（脳の凹みの入口）〉という語句がみられるので、本稿引用文②中の〈passages〉も「入口」と訳したゆえんである。ただ両者の単語〈entrée〉と〈passages〉には単数と複数の違いがある。そこで筆者は後者にあわせ、〈脳の凹みの入口〉は複数あると読む。

(75) C.⊕P.18引用文⑥参照。またそこに、本文註(75)以下に記した〈筋肉〉や〈身体すべての部分〉のことも書かれている。

(76) A.⊙ART15P.703参照。

(77) A.⊕P.808（またC.⊕P.17註(36)）参照。

(78) C.⊕引用文⑦P.18（引用文⑦の最初の文章は、本稿引用文②中の最後の文章（ところで）以下と同じであることを断わっておく）参照。

(79) C.⊕引用文⑦P.19参照。

(80) C.⊖引用文④⑥P.P.59-60参照。

(81) C.⊕引用文⑥P.18参照。

- (82) C.㊦引用文㊧P.19 (この引用文箇所はA.㊦ (P.842) の新段落冒頭の文章であっても、〈動物精気〉の説明の試みでは、前段を継続した内容を有している。しかしこの引用文をして最初の文章に位置づけさせるためか、血液は当初より二つの粒子に分けられていると受け取ることをよしとするように読み取れる。だが筆者は本文後述通り、この読みを否定する) 参照。
- (83) B.P.248参照。
- (84) A.㊦P.808 (またC.㊦P.17) 参照。
- (85) C.㊦引用文㊦P.P.18-19参照。
- (86) 〈動物精気をつくる〉は本稿註(68)、これとほぼ同意と捉える〈動物精気になる〉は本稿註(79)参照。
- (87) 本稿註(73)参照。
- (88) B.P.248参照。
- (89) A.㊦ART10P.700参照。
- (90) 本稿後記引用文㊨参照 (その訳の冒頭に〈感覚 (sens)〉という語がある。しかし㊨の〈感覚〉は、引用文㊨でおよそ「求心的」な神経を伝わって脳に入る身体的能力 (感覚) があると読み得ると相違して、「遠心的な神経」にかかわる能力とみなされる。つまりこの㊨ (『情念論』ART7) の小見出しは「身体」を謳う説明にもかかわらず、㊨中で〈感覚のすべてが神経に依存している〉と書かれる以上、その〈感覚〉は㊨全体の文意から、「求心 (身体より脳 (精神)) 的」よりも、終始「遠心 (精神より身体) 的」な神経に伝達されよう脳 (精神) に発した能力と捉えられるのである。するとなおさら注目すべきは、〈感覚 (sens)〉が〈sens) のままで、精神からの「遠心的」な神経を通し身体に伝わることを可能にするということである。これについての詳述は本稿の終わりのところに譲らねばならない)。
- (91) C.㊦引用文㊦P.59-60やC.㊦引用文㊦P.18 (ただし両方の〈vent) のうち、筆者は㊦のそれを〈空気〉と訳したことを、ここで〈風〉と訂正しておく。また〈空気〉の方は本稿引用文㊨に〈air) の語が記されるからにせよ、およそ〈vent) と同意にみてよかろう。) 参照。
- (92) A.㊦ART129P.755参照。
- (93) A.㊦ART22P.706 (またC.㊦引用文㊦P.71) 参照。なお本稿註欄註(90)中に記した「求心的」な〈神経〉についてはこのART22参照 (ここにも〈神経〉によって脳に達する) とある、「遠心的」な〈神経〉については本稿引用文㊨参照。
- (94) A.㊦ART7P.698参照。

(95) ただし次段落の「何か」に対応させて記した〈感覚 (sens)〉は、筆者がそれも〈神経に依存している〉能力であるとみる以上、かえって〈外的感覚器官〉や内臓 (器官) のそれぞれで生じ、「求心的」な〈神経〉を伝わり〈脳〉へと到達する身体でしかないように察知される。要は引用文㉔の〈tous les sens〉だけは、「遠心的」な〈神経〉にのみにはなく、「求心的」な〈神経〉にかかわることも含意されるということである。

(96) 註(95)の註欄参照。

(97) C.㉔註(56)P.28参照。

(98) 繰返すが、〈血液〉のみが流れる「求心的」な〈動脈〉と、身体で感覚や想像なる各能力が伝わる「求心的」な〈神経〉はそれぞれ個別に、〈脳〉にあっては真先きに〈脳の凹み〉につながれ、「求心的」な〈動脈〉だけはその後順次〈動脈〉中の〈孔〉へ、〈腺H〉の前の〈小さな動脈〉との分かれ目まで流れることを、ただし〈脳の凹み〉にて〈血液〉と能力は〈混ざ〉り、〈孔〉や〈腺H〉の前の〈小さな動脈〉のおのおので能力を含んだ血液は〈細かな粒子〉と〈粗い粒子〉に分けられることをさしていた。だが註(56)(上記註(97))を参照して、一方の「遠心的」な〈神経〉が〈神経に入る〉と記される〈脳本体〉をその出所となすと断じるにしても、問題となるのは、他方の「遠心的」な〈動脈(血液)〉が立ち寄る部位の順次なのである。註(56)をみるかぎり、〈腺H〉の前にある〈小さな動脈〉以降を〈血液〉の「遠心的」な流れと主張してきた筆者にとって、この流れゆえに、〈腺H〉の次には当然〈血液〉の「求心的」な流れとならない「遠心的」用の〈動脈〉にかかわる部位、すなわち〈脳本体〉が問われてしかるべきなのに、「遠心的」な〈動脈〉の立ち寄る先きは、まず〈脳の凹み〉、そして〈脳本体〉の順次としか読み取れない。それでは筆者の主張は間違いか。そうでもない。註(56)の註欄(P.41)に掲げおいたことによると、つまり註(56)の意味内容と文体がほぼ相似するとみる文章(既出引用文㉔⑦(C.㉔P.60))が〈ある動物精気(血液)〉が脳の凹みに入るに従って、ほかの動物精気は脳本体にある多くの孔を通して出てゆき、これらの孔は動物精気を神経に…導く)と語ることによると、〈ある動物精気〉と〈ほかの動物精気〉がそれぞれ〈脳の凹み〉と〈脳本体〉に入るのが、あたかも同時であると受け取ることができる。しかし比較し得る他の文章が見当たらないから、〈動物精気(血液)〉が註(56)の〈脳の凹み〉から〈脳本体〉へ入る順次が正しいのか、それとも同時に各部位へ入るのが正しいといえるか定かにならない。ただ註(56)たる『人間論』(1630-1633年)や㉔⑦たる『情念論』(1649年)の両作品では、書かれた

年代にずれがあるし、「遠心的」な〈血液〉の流れが各文章にて先きに記されるのは、前記した兩引用文とも〈脳の凹み〉であることは確かであるから、その順次は〈脳の凹み〉、次いで〈脳本体〉になろう。しかしながら「遠心的」な〈神経〉の方は、これが〈脳本体〉にあると各文章に語られるからして、〈脳本体〉次に〈脳の凹み〉の順で〈脳から出る〉ということになろう。だから「遠心的」な〈神経〉において、〈脳から出る×脳〉とは、〈脳の凹み〉となろう、あるいは筆者がその二つの部位をいっしょにして語った〈脳の中枢部位〉となろうとあってよい。なんとすれば、「遠心的」な〈神経〉にあつては、〈脳の凹み〉だけではなく、〈脳本体〉こそ関係してこなければならぬからである。それにしても、以上のことはシモーヌ・ヴェーユがいうように、「不明瞭」であると筆者も指摘せざるを得なくなる。

(99) C.Ⓒ註(34)P.19(またA.ⒹP.824)参照。この引用文は次の通りである。(Quand Dieu unira une âme raisonnable à cette machine, ... il lui donnera son siège principal dans le cerveau.)

(100) 註(99)の原文中の〈cerveau〉の訳は普通〈脳〉であつて、筆者の記す「脳の中枢部位」とはならないはずである。しかし本文以下にも述べるように、筆者の訳語にしておかないと、〈理性的精神〉の特徴とあってよい「能動的」諸能力が漠としたたんなる〈脳〉という訳では、〈脳〉のいずこの部位のかかる諸能力なのか(これが〈腺H〉)に働きかける場合、デカルトはそれこそ〈腺H〉を〈脳〉の一部とみなしていたではないか、またこの働きかけが何によって可能になるのかさ定かになし得ない。そこで諸能力が「何」か、すなわち「遠心的」な〈神経〉によって、働きかけ得る関係がみえてこなければならぬ。ここにこの諸能力と「遠心的」な〈神経〉がかかわるといえるがゆえに、〈cerveau〉は〈脳本体〉のみか(〈脳本体〉のことならば、彼は〈cerveau〉と書き込まず、〈la substance du cerveau〉と明記すべきだ)、〈脳の凹み〉をも含意させた〈脳の中枢部位〉と理解されることが必要である。

(101) C.Ⓒ引用文⑰や⑱P.1参照。デカルトがたんに〈cerveau(脳)〉と書き込むにしても、この〈脳〉としての部位が〈脳の中枢部位〉に当てはまると捉えておかないと、〈脳の中枢部位(脳の凹みと脳本体)〉をそれぞれ〈理性的精神〉とみなした、この精神の語にのみ値いしよう諸能力、たとえば引用文⑰でいう〈疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、(なおまた想像し、感じる)〉(ここで括弧に付したのはもっぱら〈腺H〉の〈脳〉の一部に対して働きかける諸能力と断じたからである。もし〈想像し、感じる〉諸能力それぞ

れが「時間的経過」にあって働きかけることもできるといえるならば、それは〈脳の中枢部位〉内で生じることになろう) 諸能力がいったいどの〈脳〉に組み入れられるかさえわからなくなるであろう。

- (102) C.㊦引用文註(34)P.19あるいはP.P.23-26参照。
- (103) C.㊧引用文㊦㊧P.60参照(正しくは〈神経に導く〉と記されるが、これは〈神経に入る〉という語句と同意と理解してよい)。
- (104) C.㊧P.79参照(その頁には精神としての想像の語が三つ記されるが、この〈腺Hの表面〉や〈脳本体〉での表出以外は、身体としての想像になろう)。
- (105) C.㊦引用文㊦P.68参照。
- (106) C.㊦引用文㊦P.68(そこに〈想像したり感じたりするとき〉)と記されるし、この「能動的」各働きかけの仲介がみられるからこそ、産出も表出もする諸能力は「能動的」諸能力になると断じてよい)。
- (107) 産出(または誕生)する諸能力は、〈sentir〉にあっては、「能動的」感覚(sentiment)(ただし本文を踏まえると、これは二つの「能動的」感覚を有することになる)、〈imager〉にあっては、筆者が名付け得た「能動的」、「たんなる想像」、「悟性」を手助けする想像と「〈情念〉になる想像」である(想像に関しては前記註(104)を参照)。
- (108) 表出する(諸)能力は、「能動的」感覚(sentiment)と「たんなる想像(imagination)」だけになるとみる。そしてこの二つをさして、「〈腺(H)という精神〉の諸能力ということが出来る。だがこの二つの名称について付言しておく、「能動的」感覚や「たんなる想像」なる各能力は本文に記す通り、〈細糸が結合したり、からまったり〉(本稿引用文㊦参照)しながら、〈腺Hの表面〉で表出する(どう表出するかは次号に譲る)わけだから、本来はその表出の時点で、筆者の名付けた各能力が成り、各名称が与えられるべきところであろう。しかし㊦で〈細糸が結合したり、からまったりするさまざまな有り様〉をみせる(〈さまざまな有り様〉は〈結合する〉や〈からまる〉だけの複数をさすか、これら以外も含まれると読むか不明である)と語られることにあって、各能力は、上記括弧内の前者の場合に、「能動的」感覚が〈細糸が結合する〉ことで、「たんなる想像」が〈細糸がからまる〉ことになるのか、はたまた括弧内の後者の場合に、各能力それぞれが〈細糸が結合したり、からまったり、(これら以外の有り様を有したり)〉して、一に「能動的」感覚が、一に「たんなる想像」が成るとみるところにあるのか明確になつてはこない。さらに註(107)に書き残した他の諸能力の名称、すなわちもう一つの「能動的」感覚、「〈悟性〉

を手助けする想像」と「〈情念〉になる想像」についていえば、このおのおのは本稿引用文⑳の〈細糸が互いに離れてはわずかしか揺さぶられない〉という文意に従うかぎり、〈腺Hの表面〉に表出しない諸能力になる、換言すると〈腺H（細糸）から出〉て、〈脳の中枢部位（脳本体）〉に向かう（動脈）に戻る諸能力になる、その時点で、本来名付けられてしかるべきであろう。なんとなれば、おのおのは〈脳の中枢部位（脳本体）〉の「遠心的」な〈神経〉に入り、そこで〈脳の中枢部位（理性的精神）〉の諸能力の働きかけを受けて、新たな諸能力を表出する際の素材に充当してくるからである。とどのつまり、もう一つの「能動的」感覚は〈意志（する）〉という働きかけを受けて〈情念〉を成立させる能力になる、想像の方でたとえば、「〈悟性〉を手助けする想像」はそれこそ〈理性的精神〉の〈悟性〉につながり、この働きかけを受ける能力になるといわねばならぬからである（「〈情念〉になる想像」の方はその詳細を次号に譲るほかないとしても、およそ上記〈情念〉の場合に似てくるのではないかと予想する）。ただ〈細糸が互いに離れてはわずかしか揺さぶられない〉と記されるたった一つの、しかも共有（通）することになる有り様において、あるいはまた〈腺H（細糸）から出〉て、〈動脈〉に戻るところにおいて、実際この三つの能力に分けて命名することは不可能であると察知していたので、筆者は〈腺H〉内の〈小さな動脈〉の身体感覚に〈sentir〉が働きかける際に、もう一つの「能動的」感覚も、かかる身体感覚に〈imaginer〉が働きかける際に、「〈悟性〉を手助けする想像」や「〈情念〉になる想像」も産出するとして、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉における時点にて、各能力の名称を明記した次第である。このことはたとえば「能動的」感覚には、これが「表出する」場合と「表出しない」場合があったから、各場合に対し、予めその各能力に名称を与えずに各場合の区別ができないことで知り得るはずである。

(109) 本稿引用文㉑（または本稿註(108)の註欄参照。）

(110) 本稿引用文㉒（または本稿註(108)の註欄）参照。

(111) C.㉑引用文㉑P.83参照。

(112) 後者の〈細糸（les petits filets）〉の語は本稿引用文㉑㉒と㉑に出ている。

(113) A.㉑P.854参照。

(114) C.㉑引用文㉑P.68やC.㉑引用文㉑P.83参照。

(115) 〈腺H〉内の〈小さな動脈〉での産出諸能力とは、筆者がすでに命名し、前記（本稿註(104)参照）もしておいた「能動的」感覚、「たんなる想像」、「〈悟性〉を手助けする想像」、「〈情念〉になる想像」をさすし、これらの諸能力の

うち、〈腺Hの表面に描かれる（表出する）〉能力は、本稿次段落以降（この段落からは二段落目）に記す通り、「能動的」感覚（これも本稿引用文⑩の前の段落で語ったように、二つの「能動的」感覚があるというなかでは、〈細糸が結合〉して〈腺Hの表面〉に表出する「能動的」感覚（本稿の現段落より二段落目参照）にかざられる）と「たんなる想像」の二つのみとなる。

- (116) 〈腺H〉なる〈座〉について、今一度整理しておく。既出引用文⑨中の〈想像と共通感覚の座である腺H〉(la glande H, où est le siège de l'imagination, et du sens commun) という語句は以下のことを意味させよう。これに呼応する同⑨の〈理性的精神が何らかの対象を想像したり感じたりするとき〉の記載から、この〈理性的精神〉の各能力の働きかけが実現されるにあつては、何はともあれ〈腺H〉内の〈小さな動脈〉に〈何らかの対象〉、すなわち身体の想像(imagination)や身体感覚(sens)たる身体各能力が流れ込んでいなければならない。そこではじめて、身体想像に対し、〈理性的精神〉の〈想像する(imaginer)〉が、身体感覚に対し、その〈感じる(sentir)〉が、ともに〈脳の中樞部位(理性的精神)〉の「遠心的」な〈神経を介して〉働きかけることができるのである。その際、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉に身体想像や身体感覚が流れ込むのは同時にではないことが、また繰返すが、たとえばかかる〈小さな動脈〉に流れ込んでくる身体想像に応じて、〈理性的精神〉の〈想像する〉が対処することが、またさらに〈想像する〉働きかけにおいて、〈腺H〉は複数の想像(imagination)を産出(誕生)することが察知されるために、この例では〈腺H〉は〈想像の座〉となっている必要があるというわけである(この経緯は他方の感覚に関しても同様である)。ただし複数の想像のうち、「たんなる想像」だけが「〈腺(H)という精神〉の能力となることは本文後段にて記すにしても、この「たんなる想像」こそ〈想像...の座である腺Hの表面に描かれる(表出する)〉からして、〈腺H〉が〈想像の座〉とみなされよう範囲は、〈腺H〉の内部(内側)にある〈小さな動脈〉や〈細糸(神経)〉をさしていうだけでなく、〈神経〉のある、この〈腺Hの表面〉(〈表面〉に〈神経〉があることは次回に検討)をも含んで捉えられることを付け加えおく。したがって、〈腺H〉内に最初から、〈想像の座〉や〈共通感覚の座〉があたかも「部位」として設定されているとは読んでではないということになる(以前の論稿で「部位」とみたことはここに訂正する)。

(117) C.⑨引用文⑩P.73参照。

(118) 〈腺H(内の〈小さな動脈〉)〉では本文に書き添えたように、多くの能力が

産出（誕生）する。それがために、筆者はこの産出段階で、多くの能力をすでに、「能動的」感覚、「たんなる想像」、「〈悟性〉を手助けする想像」と「〈情念〉になる想像」という名称を付して区別せずにおれなかった。だがかかる命名は本来、とくに「能動的」感覚の一と、「〈悟性〉を手助けする想像」や「〈情念〉になる想像」とにあっては、これらはおのおの本文通り〈腺H〉ではなく、〈理性的精神〉で「表出」しよう「新たな能力」の素材になるのだから、その〈理性的精神〉における「新たな能力」の「表出」をまっぴらにされるといわねばならないはずである。たとえば「〈悟性〉を手助けする想像」は〈理性的精神〉の〈悟性〉とのかかわりを有する想像であって、この想像に〈悟性〉としての能力が働きかけて、何らかの「新たな能力」が表出するという具合なのである。したがって産出段階での命名は表出段階の素材能力と無関係ではあり得ないと断わっておく。

(119) 本稿註(95)の註欄参照。

(120) C.㊦引用文㊦㊦P.60参照。

(121) C.㊦註(56)なる引用文（全訳掲載）P.28参照。

(122) A.㊦P.872参照。

(123) C.㊦引用文㊦㊦P.59参照。

(124) C.㊦引用文㊦㊦( P.59) 以下の本文で、〈porc〉や〈trou〉が同意と捉えられているが、ここに訂正するといっておく（次号参照）。